宮古市埋蔵文化財調査報告書48

大付（おおづけ）遺跡

—平成５年度、平成６年度発掘調査報告書—

1996.3

岩手県宮古市教育委員会

宮古市埋蔵文化財調査報告書48
A Report on the Archaeological Research in Miyako City, No.48

大付遺跡

—平成５年度、平成６年度発掘調査報告書—

大付遺跡空中写真

1996.3

岩手県宮古市教育委員会
The Miyako Boad of Education
Miyako, Iwate, Japan

序　　文

宮古市の北部に位置する崎山遺跡群には、崎山貝塚・白石遺跡・大付遺跡（大付貝塚）などの縄文時代の重要な遺跡が数多く存在しています。

この中で、大付遺跡は明治43年に中嶋吉兵衛氏に発見されて以来、岸上鎌吉博士や柴田常恵氏などによる調査が実施されており、古くから中央の学会にも知られた遺跡であります。

近年では、昭和53年度に県立博物館へ委託して実施した第１次調査以来、９次にわたる発掘調査が実施されています。この結果、縄文晩期の屈葬人骨をはじめとする貴重な遺構や遺物が発見されています。

本書は日出島漁港関連道整備事業の実施に先立ち、宮古市水産課より依頼を受けて、平成５年度及び平成６年度に実施した第８次調査及び第９次調査の内容をとりまとめたものです。

今回の発掘調査の結果、これまで大付遺跡では未発見だった縄文前期初頭の遺構と、弥生時代の遺構を検出することができました。

このことは、大付遺跡が従来考えられていた以上に長期間にわたり集落が営まれていたということを示すことになります。

更に弥生時代の遺構につきましては、宮古市のみならず岩手県内でも資料数が限られている現状において、今後の大付遺跡の調査によりその実態がいくらかでも明らかにされる可能性が大きくなったことは非常に有意義なことだと考えられます。

本書が考古学関係者の研究の一助とされることはもちろんのこと、広く一般の方々にも活用され、埋蔵文化財保護のために役立つことを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にあたりご指導、ご協力を賜りました関係各位に対し、心より感謝申し上げて序文といたします。

平成８年３月

岩手県宮古市教育委員会

教育長　佐　藤　勇　逸

例　　言

1．本書は、平成５年度から平成６年度にかけて実施した大付遺跡の緊急発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、日出島漁港関連道整備事業の実施に先立ち、宮古市水産課の依頼を受けて宮古市教育委員会（教育長　佐藤勇逸）が主体となって実施した。

3．発掘調査及び本書の執筆、編集は高橋・橋本・三浦が担当し、竹下・鎌田・阿部・工藤がこれを補佐した。

4．調査座標は平面直角座標第Ｘ系を座標交換して使用したが、調査用の局地的な座標系であることを明示するためにＲを冠して表示した。

座標軸方向　　第Ｘ系に準じる

調査座標原点　　Ｘ　－35,800.000　　Ｙ　＋97,000.000

5．高さは標高値をそのまま使用した。

6．土層の観察に際しては、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄　1967）を参考とした。

7．遺構・遺物の表現については、次のとおりとした。

8．発掘調査及び本書の作成にあたり、次の方々よりご教示・御指導をいただいた。記して感謝申し上げます。（順不同、敬称略）

高橋　信雄　（岩手県教育委員会文化課）　　熊谷　常正　（盛岡大学）

小田野哲憲　（岩手県教育委員会文化課）　　佐藤　正彦　（陸前高田市立博物館）

佐藤　嘉彦　（岩手県教育委員会文化課）

9．本文中の引用文献は次のとおりとした。（いずれも宮古市教育委員会刊行）

1979　『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』　小田野哲憲・熊谷　常正 → 『大付報文79』

1983～86　『宮古市分布調査報告書１～４』　武田　将男 → 『分布調査１～４』

1986　『宮古市遺跡分布図　昭和60年度版』武田　将男 → 『分布図86』

1987～94　『崎山遺跡群Ⅰ～Ⅷ　昭和61年度～平成５年度発掘調査概報』　高橋憲太郎ほか → 『崎山遺跡群Ⅰ～Ⅷ』

1992　『金浜Ⅰ遺跡・大付遺跡』　鎌田祐二 → 『大付報文92ａ』

1992　『大付遺跡－平成３年度発掘調査報告書－』　鎌田祐二 → 『大付報文92ｂ』

1995　『崎山貝塚－範囲確認調査報告書－』　高橋憲太郎・三浦　千秋 → 『崎山貝塚95』

目　　次

序　文
例　言
目　次

Ⅰ　調査経過……1
　1　調査に至る経過……1
　2　調査要旨……1
　3　調査体制……2
Ⅱ　遺跡をとりまく環境……6
　1　大付遺跡の位置と立地……6
Ⅲ　調査の結果……8
　1　調査の状況……8
　　(1)　第８次調査……8
　　(2)　第９次調査……8
　2　基本層序……8
　3　検出した遺構と遺物……18
　　(1)　竪穴住居跡……18
　　(2)　土坑跡……26
　　(3)　その他の遺構……30
　　(4)　遺構外出土遺物……32
　4　調査のまとめ……41
　　1　第８次・第９次調査にて検出された遺構について……41
　　2　大付遺跡の集落について……42
　　3　出土遺物について……44

図　版　目　次

第１図版　第８次調査区近景
第２図版　第５号竪穴住居跡・第６号竪穴住居跡堆積状況
第３図版　第６号竪穴住居跡・第12号土坑跡堆積状況
第４図版　第16号土坑跡堆積状況・第18号土坑跡堆積状況
第５図版　第８次調査出土遺物
第６図版　第８次調査出土遺物
第７図版　第８次調査出土遺物
第８図版　第９次調査区近景・Ｊ区土層堆積状況
第９図版　第７号竪穴住居跡・第７号竪穴住居跡堆積状況
第10図版　第８次竪穴住居跡・第８次竪穴住居跡堆積状況

内表紙写真図版　大付遺跡空中写真

挿　図　目　次

第１図　位置図……3
第２図　大付遺跡周辺遺跡分布図……5
第３図　大付遺跡周辺地形図……7
第４図　第８次調査・第９次調査調査区設定図……9
第５図　第８次調査区全体図(1)……10
第６図　第８次調査区全体図(2)……11
第７図　第９次調査区全体図……12
第８図　第８次調査区土層断面図(1)……13
第９図　第８次調査区土層断面図(2)……14
第10図　第８次調査区土層断面図(3)……15
第11図　第８次調査区土層断面図(4)……16
第12図　第９次調査区土層断面図(1)……17
第13図　第５号竪穴住居跡・第16号土坑跡・第17号土坑跡……19
第14図　第５号竪穴住居跡土層断面図・炉・第16号土跡・第17号土坑跡土層断面図……20
第15図　第６号竪穴住居跡……21
第16図　第７号竪穴住居跡……22
第17図　第８号竪穴住居跡……25
第18図　第12号～第15号土坑跡……27
第19図　第18号土坑跡・第12号～第15号・第18号土坑跡土層断面図……29
第20図　第１号炭焼窯跡……31
第21図　第８次調査区出土土器(1)……34
第22図　第８次調査区出土土器(2)……35
第23図　第８次調査区出土土器(3)……36
第24図　第８次調査区出土土器(4)・第９次調査区出土土器(1)……37
第25図　第８次調査区出土石器(1)……39
第26図　第８次調査区出土石器(1)・第９次調査区出土石器(1)……40

Ⅰ　調　査　経　過

1．調査に至る経過

大付遺跡は、宮古市の遺跡コードＬＧ14－2291、岩手県の遺跡コードＬＧ14－2291として登録されている周知の遺跡である。

大付遺跡の発掘調査は、昭和53年度の第１次調査以降第７次調査までが既に実施されている。これまでの調査概要は既刊の報告書において報告されているので参照されたい。

さて、大付遺跡の東辺部には日出島漁港が存在する。日出島漁港へ至る道路としては、唯一市道崎山大付線があるが、この道路は幅員が狭く、急勾配な上にカーブも急である。また、地形的な制約もあり現道拡幅が困難なことから、新規ルートを整備し、日出島漁港を利用する人々の利便性を図ることを目的として、宮古市水産課より「日出島漁港関連道整備事業」が計画された。

今回の発掘調査は、当該事業実施に先立ち事前協議を経て、平成５年度及び平成６年度に予算処置を施した水産課の依頼を受けて、記録保存を前提として宮古市教育委員会が主体となって実施したものである。

2．調査要旨

◇平成５年度（第８次調査）

調査地点　　宮古市大字崎鍬ケ崎第14地割１～７番
　　〃　　第15地割127、128、151番
調査原因　　日出島漁港関連道整備事業
調査期間　　屋外調査　平成５年６月８日～平成５年９月27日
　　室内整理　平成５年12月21日～平成６年３月17日
調査対象面積　1,900㎡
調査面積　　1,500㎡
検出遺構　　竪穴住居跡２棟、土坑跡７基
出土遺物　　縄文土器、弥生土器、石器など

◇平成６年度（第９次調査）

調査地点　　宮古市大字崎鍬ケ崎第14地割17～19番
　　〃　　第15地割145、146、148、150番
調査原因　　日出島漁港関連道整備事業
調査期間　　屋外調査　平成６年４月26日～平成６年６月７日
　　室内整備　平成６年12月12日～平成７年３月31日
調査対象面積　1,550㎡
調査面積　　166㎡
検出遺構　　竪穴住居跡２棟、炭窯跡１基、溝跡４条

出土遺物　　縄文土器、石器など

◇平成７年度　　室内整理　平成７年５月９日～平成８年３月29日

３．調査体制

発掘調査の体制は次のとおりである。

◇平成５年度（第８次調査）

調査主体　宮古市教育委員会　教育長　佐藤勇逸

調査統括　岩田　善弘　　宮古市教育委員会社会教育課長

事務担当　山崎　吉章　　宮古市教育委員会社会教育係長

〃　　坂下　　昇　　宮古市教育委員会社会教育係主任兼社会教育主事補

調 査 員　高橋憲太郎　　宮古市教育委員会社会教育係主任

〃　　鎌田　祐二　　宮古市教育委員会社会教育係主任

〃　　橋本　晃一　　宮古市教育委員会社会教育係主事（調査担当）

〃　　阿部　　豊　　宮古市教育委員会社会教育係埋蔵文化財調査員

〃　　工藤　剛司　　宮古市教育委員会社会教育係埋蔵文化財調査員

◇平成６年度（第９次調査）及び平成７年度（室内整理）

調査主体　宮古市教育委員会　教育長　佐藤勇逸

調査統括　浦野　光廣　宮古市教育委員会社会教育課長

事務担当　田鎖　春男　宮古市教育委員会社会教育係長

〃　　坂下　　昇　宮古市教育委員会社会教育係庶務主査兼社会教育主事

調 査 員　竹下　将男　宮古市教育委員会社会教育係主任

〃　　高橋憲太郎　宮古市教育委員会社会教育係主任

〃　　鎌田　祐二　宮古市教育委員会社会教育係主任

〃　　橋本　晃一　宮古市教育委員会社会教育係主事

〃　　三浦　千秋　宮古市教育委員会社会教育係主事（調査担当）

〃　　阿部　　豊　宮古市教育委員会社会教育係埋蔵文化財調査員

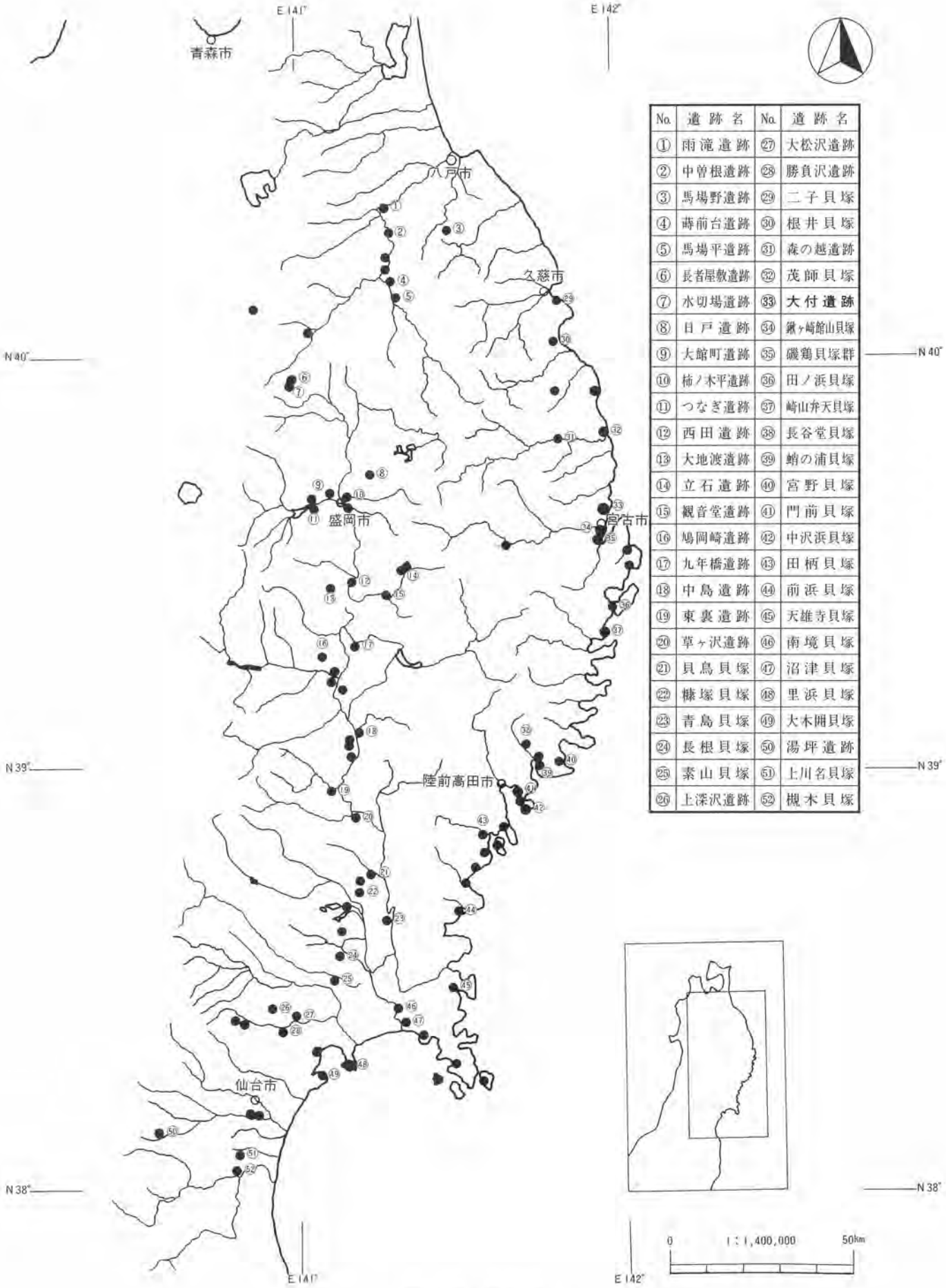
〃　　工藤　剛司　宮古市教育委員会社会教育係埋蔵文化財調査員

発掘調査及び整理作業については次の方々から多大なご協力をいただいた。（敬称略）

《地 権 者》　山内鶴太郎、山内實夫、佐々木深松、佐々木確志、佐々木学、佐々木誠
佐々木善作、佐々木清、山崎長平、大越功、大越サタ

《発掘調査》　古館友三、中居磯雄、水本正男、菅原テルミ、藤谷晶子、小野寺青治郎
今津東一、小成裕信、刈屋昭三、竹原昌江、高坂雪江、斎藤貞子、菊池清八
吉田昭、佐伯裕則、阿部ハルコ、大越貞蔵、和田與之助

《整理作業》　前川友宏、杉田セキ子、味噌作宣子、北村忠治、大越貞蔵、成田寿美江
加納由美、小幡早苗、藤田育子



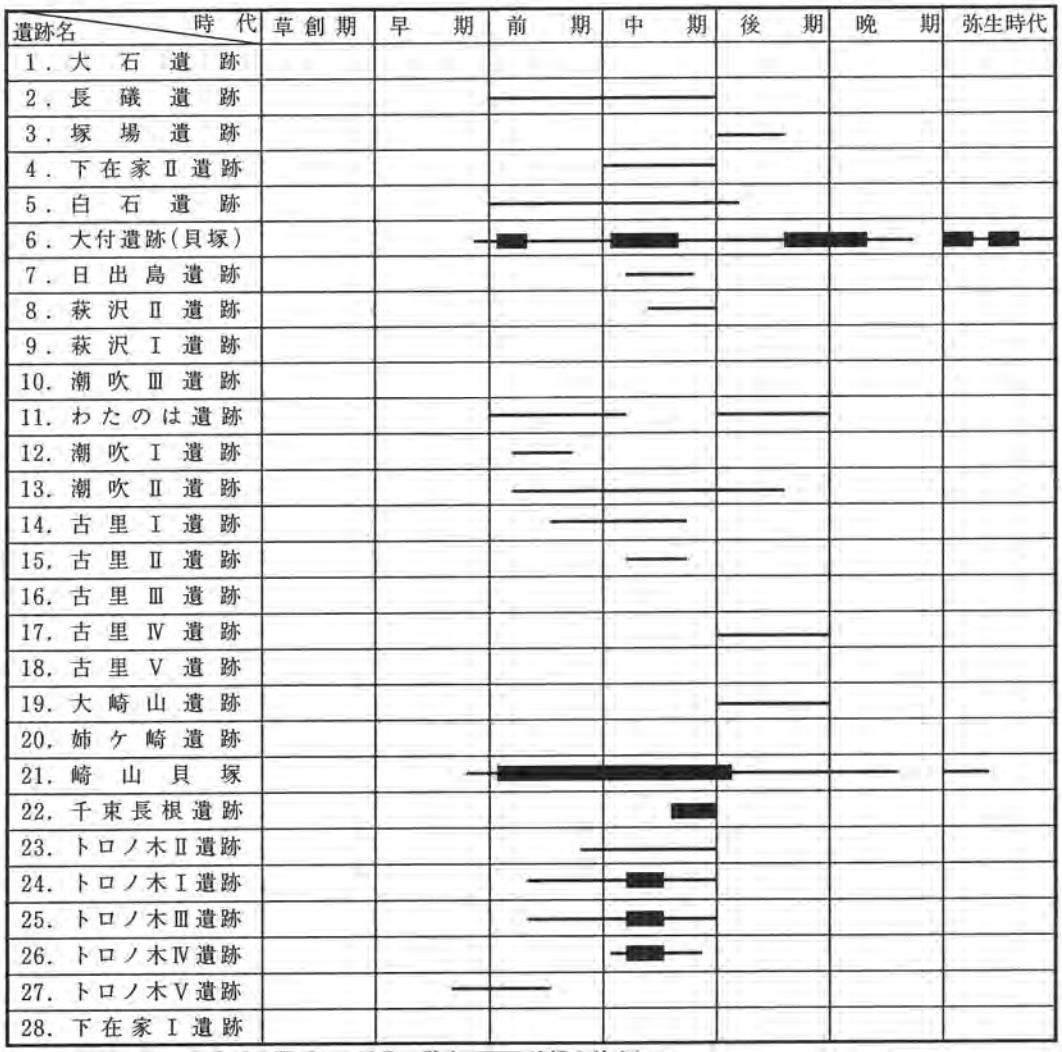
No.	遺跡名	No.	遺跡名
①	雨滝遺跡	㉗	大松沢遺跡
②	中曽根遺跡	㉘	勝負沢遺跡
③	馬場野遺跡	㉙	二子貝塚
④	蒔前台遺跡	㉚	根井貝塚
⑤	馬場平遺跡	㉛	森の越遺跡
⑥	長者屋敷遺跡	㉜	茂師貝塚
⑦	水切場遺跡	㉝	**大付遺跡**
⑧	目戸遺跡	㉞	鍬ヶ崎館山貝塚
⑨	大館町遺跡	㉟	磯鶏貝塚群
⑩	柿ノ木平遺跡	㊱	田ノ浜貝塚
⑪	つなぎ遺跡	㊲	崎山弁天貝塚
⑫	西田遺跡	㊳	長谷堂貝塚
⑬	大地渡遺跡	㊴	蛸の浦貝塚
⑭	立石遺跡	㊵	宮野貝塚
⑮	観音堂遺跡	㊶	門前貝塚
⑯	鳩岡崎遺跡	㊷	中沢浜貝塚
⑰	九年橋遺跡	㊸	田柄貝塚
⑱	中島遺跡	㊹	前浜貝塚
⑲	東裏遺跡	㊺	天雄寺貝塚
⑳	草ヶ沢遺跡	㊻	南境貝塚
㉑	貝鳥貝塚	㊼	沼津貝塚
㉒	糠塚貝塚	㊽	里浜貝塚
㉓	青島貝塚	㊾	大木囲貝塚
㉔	長根貝塚	㊿	湯坪遺跡
㉕	素山貝塚	(51)	上川名貝塚
㉖	上深沢遺跡	(52)	槻木貝塚

第1図　位置図

第１次調査から第７次調査までに竪穴住居跡及び竪穴跡４棟、土坑及び墓壙跡11基が確認されているが個別に遺構番号を付してあり、混乱をまねくために別表のように読み替える。

	調査時期	旧　呼　称	新　呼　称
第１次	昭和５３年	第１号竪穴住居跡	第１号竪穴住居跡
		第１号墓壙跡	第１号墓壙跡
第５次	昭和６３年	第１号土壙跡	第２号土坑跡
		第２号　〃	第３号　〃
		第３号　〃	第４号　〃
第６次	平成２年	第１号土壙跡	第５号土坑跡
第７次	平成３年	第１号竪穴住居跡	第２号竪穴住居跡
		第１号竪穴跡	第３号　〃
		第２号　〃	第４号　〃
		第１号土壙跡	第６号土坑跡
		第２号　〃	第７号　〃
		第３号　〃	第８号　〃
		第４号　〃	第９号　〃
		第５号　〃	第10号　〃
		第６号　〃	第11号　〃

以上とし、第８次調査以降の遺構番号はこれに続けることとした。



崎山遺跡群内の遺跡と存続時期（━ 遺物が散布、▬ 遺構を検出）

第２図　大付遺跡周辺遺跡分布図

Ⅱ　遺跡をとりまく環境

1．大付遺跡の位置と立地

宮古市は岩手県沿岸部のほぼ中央部に位置し、北緯39度29分43秒～39度43分23秒、東経141度45分20秒～142度04分44秒までの総面積338.47㎢を市域とする。北側で田老町、岩泉町、西側で新里村、南側で山田町と接し、東側には太平洋が広がる。

宮古市は地形的には、標高1,991ｍの早池峰山を最高峰とする北上山地の東縁部に当り、その山系が海岸線近くまで迫っている。市内には宮古市を北と南に大きく分断する閉伊川と、重茂半島の西に存在する伏在断層沿いに宮古湾へ注ぐ津軽石川の二大河川があり、このふたつの河川とその支流沿いには面積的には狭いながら河岸段丘及び沖積平野が広がる。そして、これらを取り囲むように北上山地から続く山地帯の縁辺部に丘陵地が形成されている。

市内東端の海岸線は陸中海岸国立公園となっている。この海岸線は宮古市付近を境として北と南とでは様相を異にする。南部は出入りの激しい沈降性のいわゆるリアス式海岸であり、北部は海岸段丘で比較的出入りが少なく、直線的であり、所々に100ｍを超す海食崖も見られる。

大付遺跡は宮古市街地の北郊、崎山地区に所存する。崎山地区ではこれまで28ケ所の遺跡が確認されており、これを「崎山遺跡群」と総称している。当遺跡はこれの東端部に位置する。

崎山遺跡群

崎山遺跡群は北から続く小本丘陵と呼ばれる海岸段丘が開析された丘陵上にある。西側の館ケ森（標高242ｍ）を最高点とするこの丘陵地は高度的には明瞭に区切られており、館ケ森の裾から標高150～80ｍで海岸線にむかってゆるやかに傾斜している。

この地区には目立った河川は皆無で、河岸段丘や沖積地の発達は著しく悪い。概して、小河川や沢などにより開析が進み、段丘面の保存状態は悪く樹木状を呈している。従って、狭い尾根や緩斜面上に立地している遺跡がほとんどで、崎山貝塚や白石遺跡などの規模の大きい遺跡は比較的少なく、反面、中小規模の遺跡が連続的に分布し、密集する状態にある。

これまでの調査成果によると、崎山遺跡群に所在する遺跡の多くは縄文時代を主体としている。しかし、わずかではあるが崎山貝塚に古代の竪穴住居跡や、萩沢Ⅰ遺跡に製鉄遺構（時期不詳）が検出されており特筆される。

大付遺跡

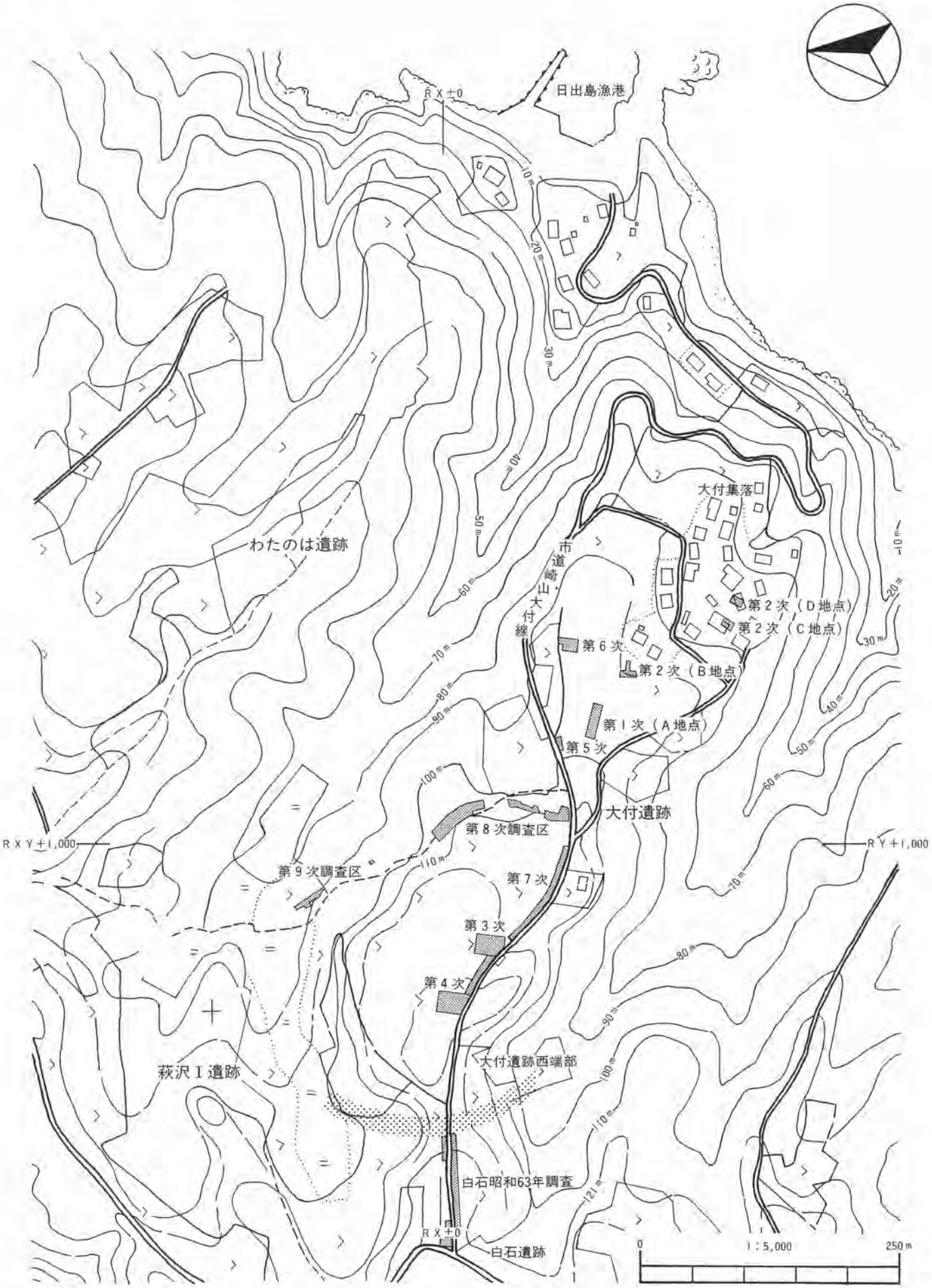
大付遺跡は、小本丘陵東縁部の面から東へ緩やかに傾斜する斜面上に立地しており、北と南は深い谷により、西側も谷筋で地形的には周囲の遺跡と区切られている。

大付貝塚

大付遺跡の発見は明治43年頃と考えられ、当初は貝塚として周知されており、岸上鎌吉により数は少ないものの５種類の動物遺存体が『Prehistoric Fishing in Japan』に記載され、また、中嶋吉兵衛により採集された骨角器類は現在でも中嶋家に保管されている。

この後、貝塚が存在したと思われる地点は宅地化してしまい、その存在は確認できない状態となっているが、現在でもこの周辺の畑地には獣骨などが散布している。

尚、この後昭和53年度～昭和54年度に岩手県立博物館へ依頼して実施した第１次・第２次調査では縄文晩期前葉の屈葬人骨などが出土しており特筆される。



第3図　大付遺跡周辺地形図

Ⅲ　調査の結果

1　調査の状況

(1)　第８次調査

本調査区は道路の敷設により破壊される部分のすべてを対象として設定し、南側（道路の起点）からＡ１区・Ａ２区・Ｂ１区・Ｃ１区・Ｃ２区・Ｄ１区・Ｅ１区・Ｅ２区・Ｆ１区・Ｆ２区・Ｇ１区・Ｇ２区・Ｈ１区・Ｈ２区・Ｉ１区・Ｉ２区と呼称した。

Ａ区とＢ区は谷状の地形を呈しており、黒色土等が厚く堆積するものの、遺構は検出されず、遺物の出土量も少なかった。

Ｃ区～Ｉ区は台地上に位置し、縄文時代～弥生時代の遺構が検出された。遺構の大半は比較的平坦なＣ区～Ｇ区に集中し、Ｈ区・Ｉ区は北向きの緩斜面のためか、時期不明の土坑跡と縄文土器等の遺物が検出されたのみである。

(2)　第９次調査

本調査区は第８次調査区の北側に連続する。本調査区も道路の敷設により破壊される部分を対象としたが、遺構・遺物が存在する可能性が極めて小さい急傾斜地を除外して設定した。南側からＪ１区・Ｋ１区・Ｌ１区・Ｍ１区・Ｍ２区と呼称した。

Ｊ１区はＩ区に続く斜面上に設定したものであり、黒色土等が厚く堆積するものの、遺構・遺物は検出されなかった。

Ｋ区～Ｍ区は斜面下端に連続する平坦面上に位置し、Ｌ１区とＭ１区で縄文時代の竪穴住居跡や時期不明の炭窯跡を検出している。また、Ｋ区からＭ区の全域にわたり近代から現代にかけての溝跡群を検出している。

2　基本層序

第８次・第９次調査区の基本層序は次のとおりである。

Ⅰ　層　表土（耕作土）及び旧表土等を一括した。Ⅰａ層は遺跡全体を覆う表土で、やや粘性のある暗褐色土を基本土とする。固いがややしまりがない。Ⅰｂ層はＪ区にのみ堆積し、褐色土を基本土とする。Ⅰｃ層はＡ区～Ｊ区に堆積し、旧表土と思われるもので、やや明るい黒褐色土～暗褐色土を基本土とする。やや固くややしまりがない。

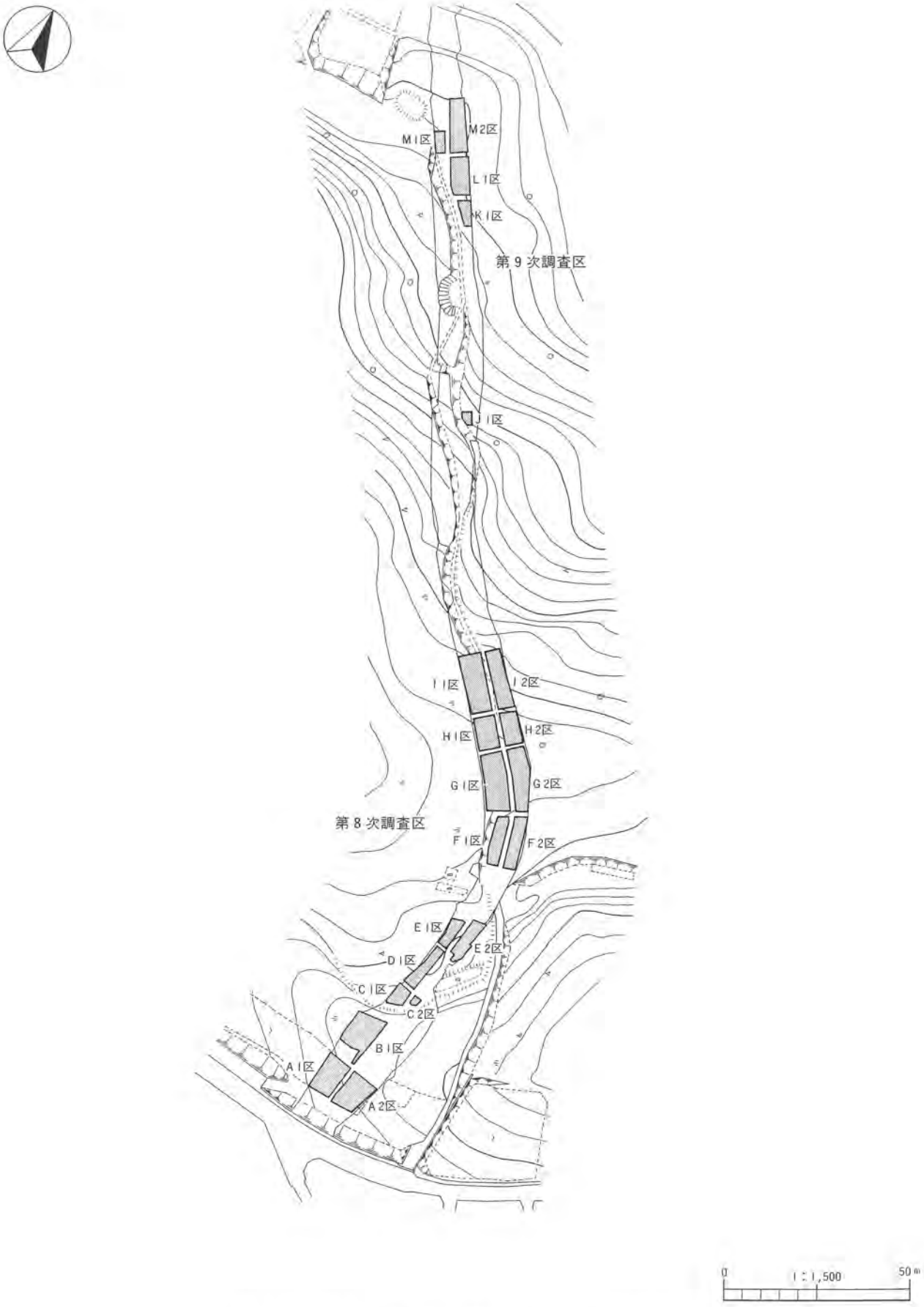
　Ⅰｄ層～Ⅰｆ層はＫ区にのみ堆積し、Ⅰｄ層は明黄褐色土を、Ⅰｅ層は暗褐色土を、Ⅰｆ層は褐色土を基本土とする。

Ⅱ　層　Ａ区～Ｊ区にかけて断続的に堆積する黒褐色～暗褐色土層である。

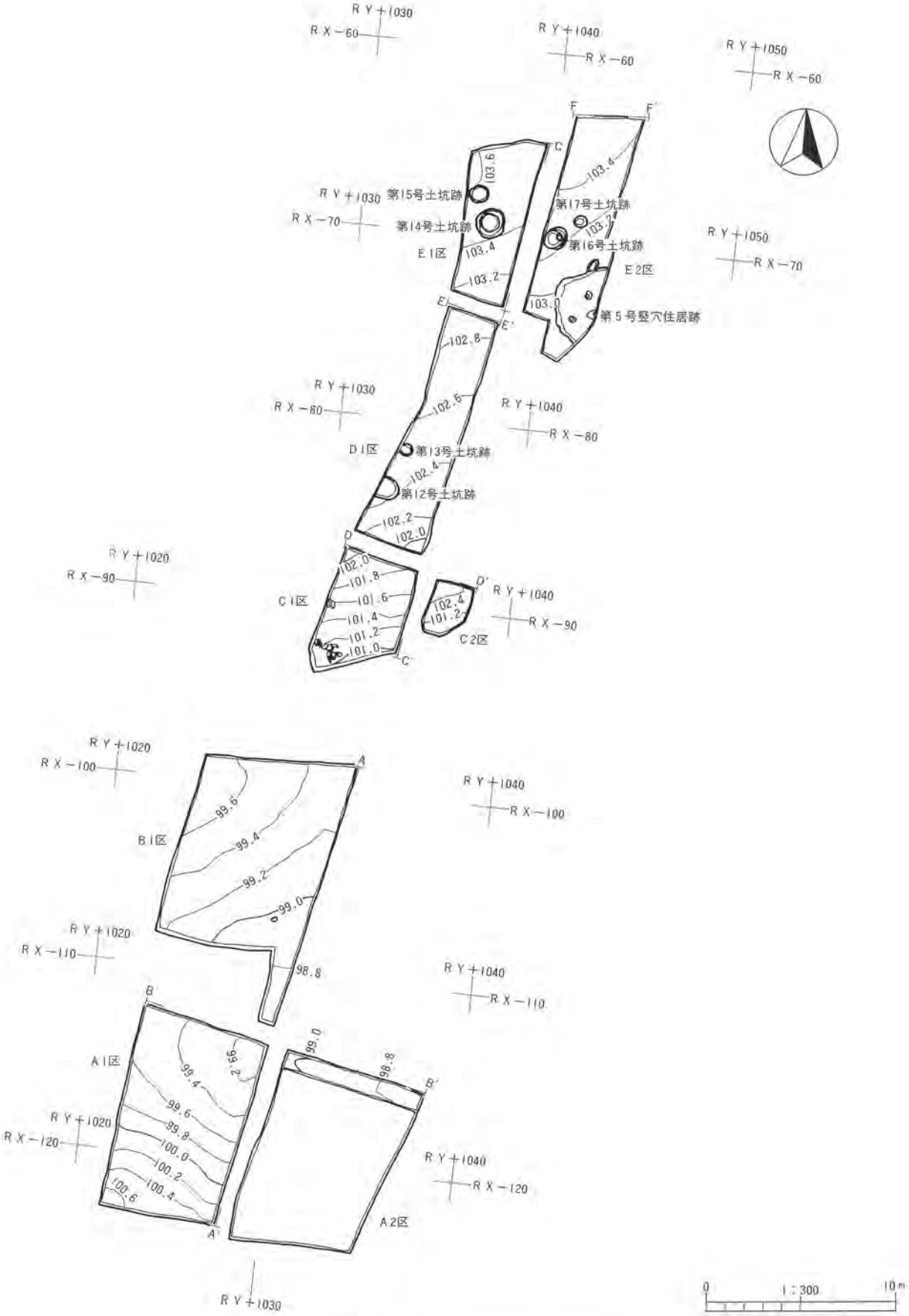
Ⅱａ層　黒褐色土を基本土とし、暗褐色土塊を少量含む。やや柔らかく、ややしまっている。

Ⅱｂ層　Ｊ区にのみ堆積し、暗褐色土を基本土とする。やや柔らかく、しまりは中程度である。

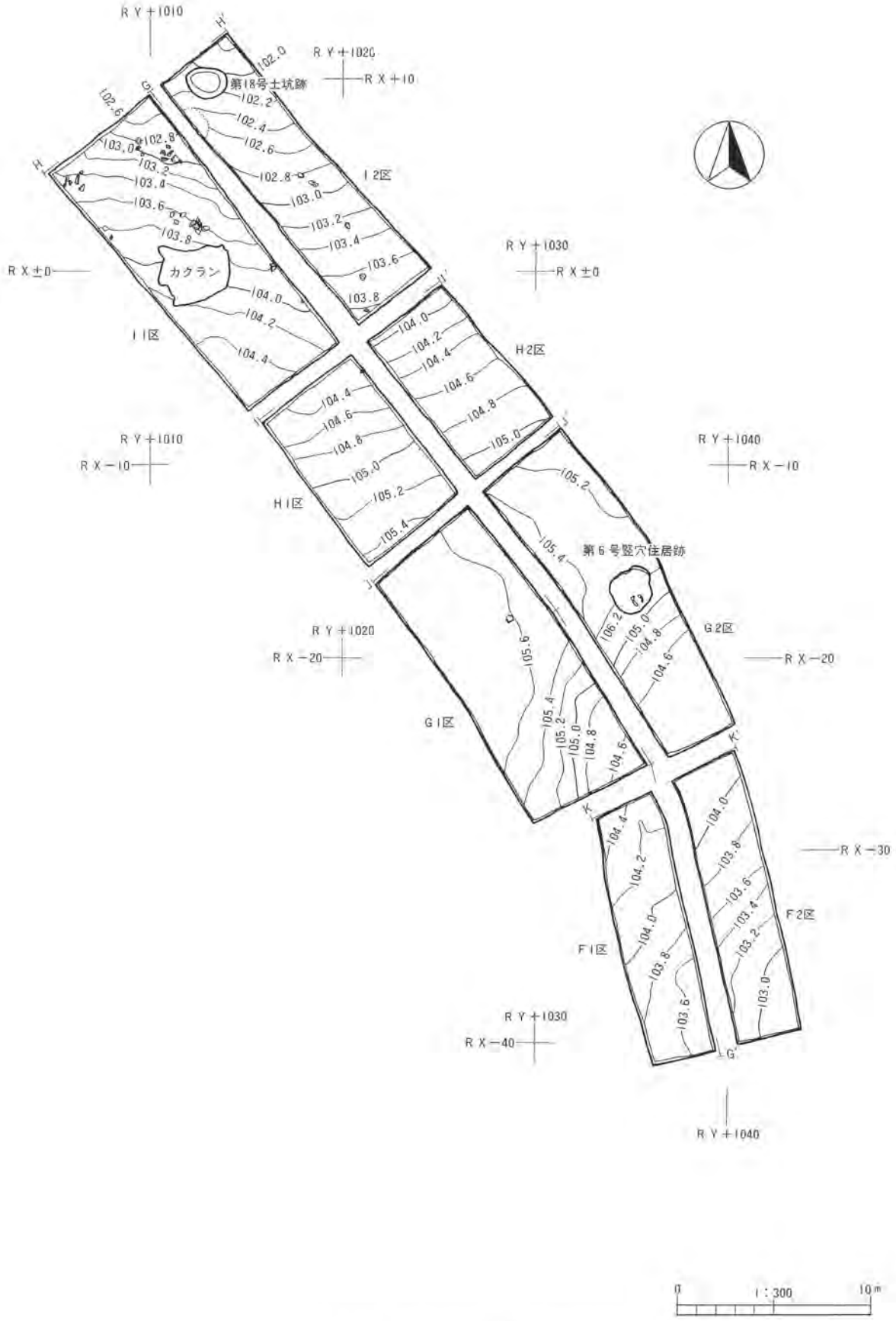
Ⅲ　層　Ａ区・Ｂ区・Ｊ区にのみ堆積する。Ⅲａ層のみであり、黒色土を基本土とし、黒褐色土塊を少量含む。Ｊ区では黄色の小礫粒を多量に含む。やや柔らかく、しまりは中程度である。



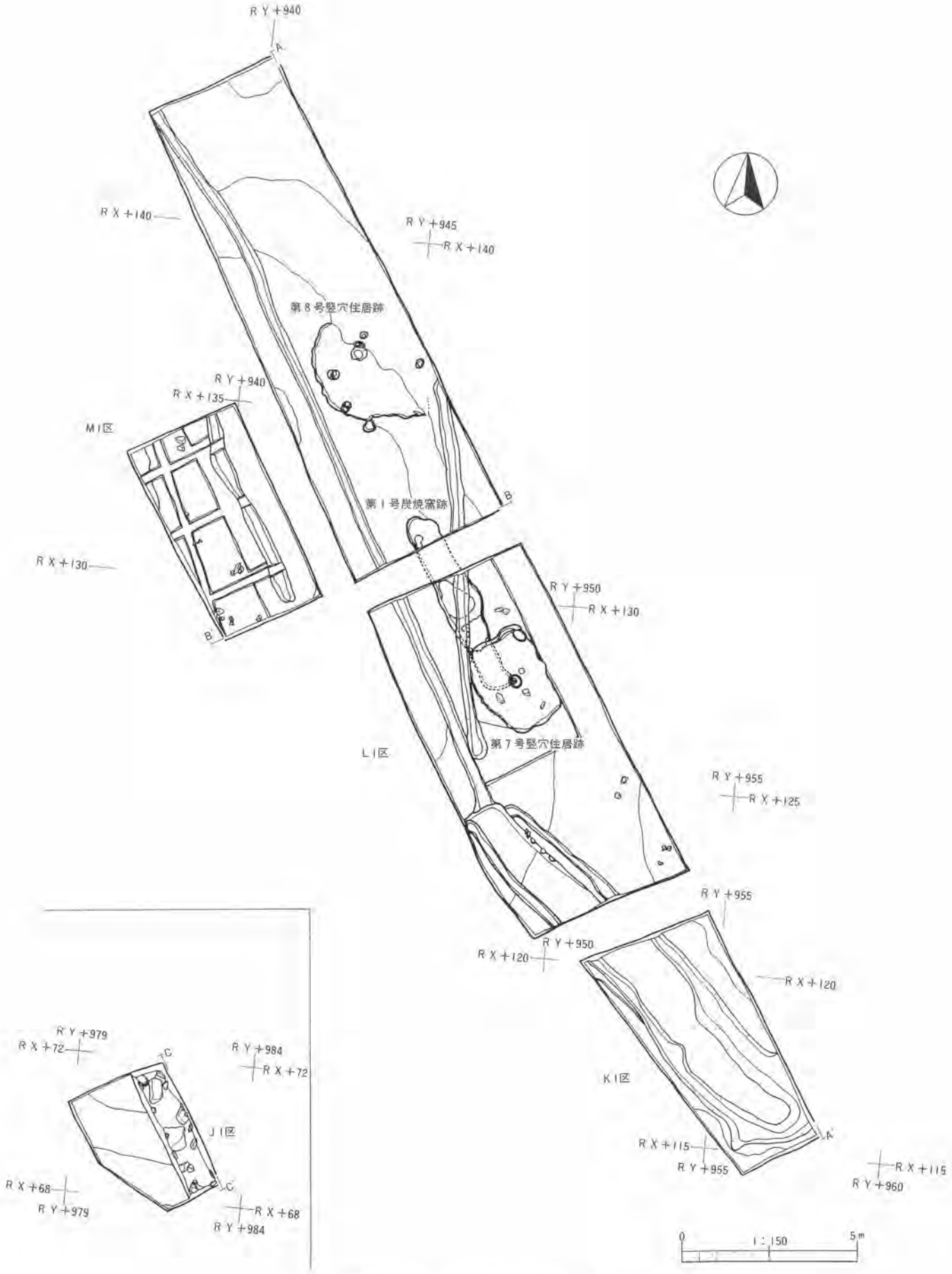
第4図　第8次調査、第9次調査調査区設定図



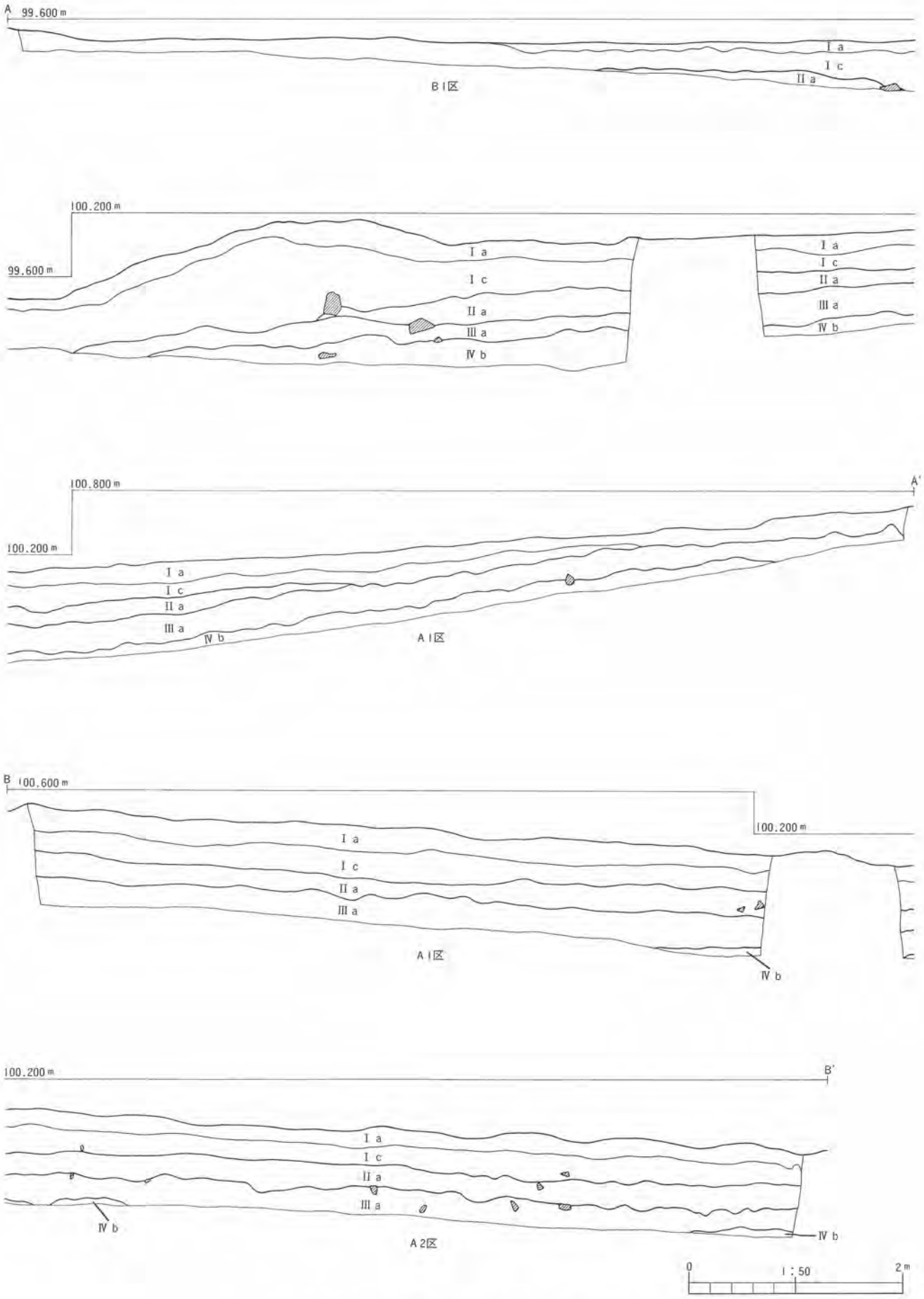
第 5 図　第 8 次調査区全体図(1)



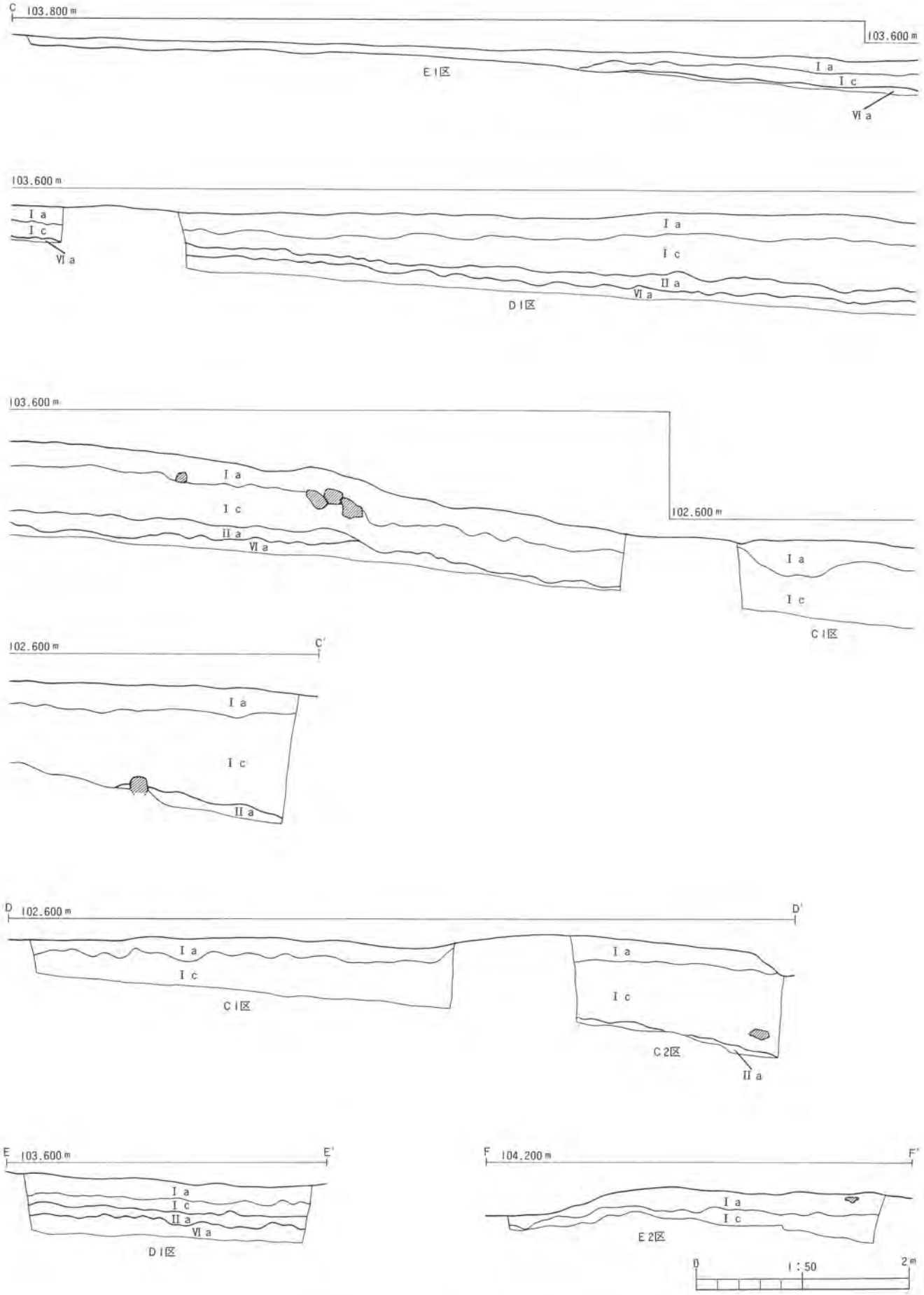
第6図　第8次調査区全体図(2)



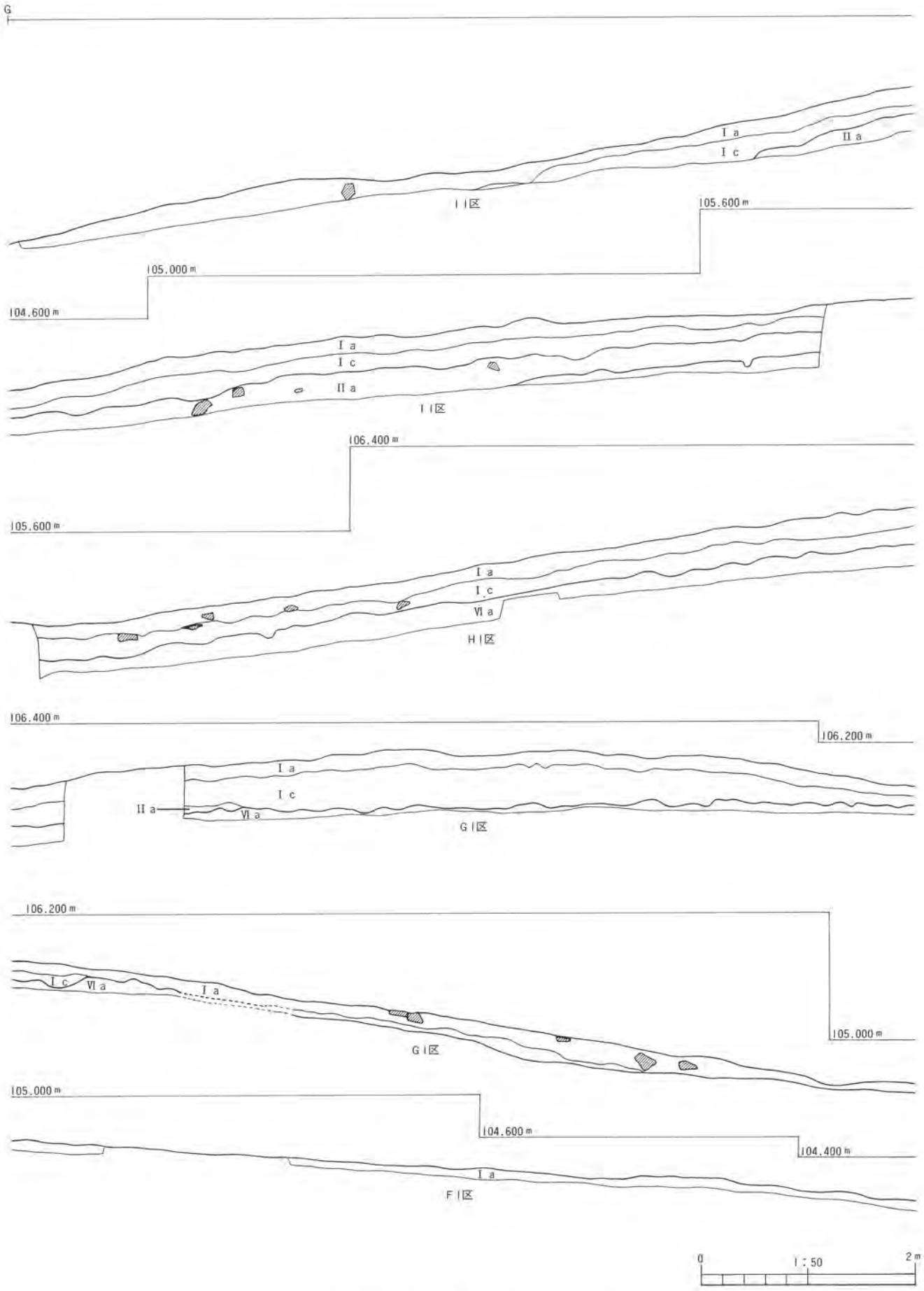
第7図　第9次調査区全体図



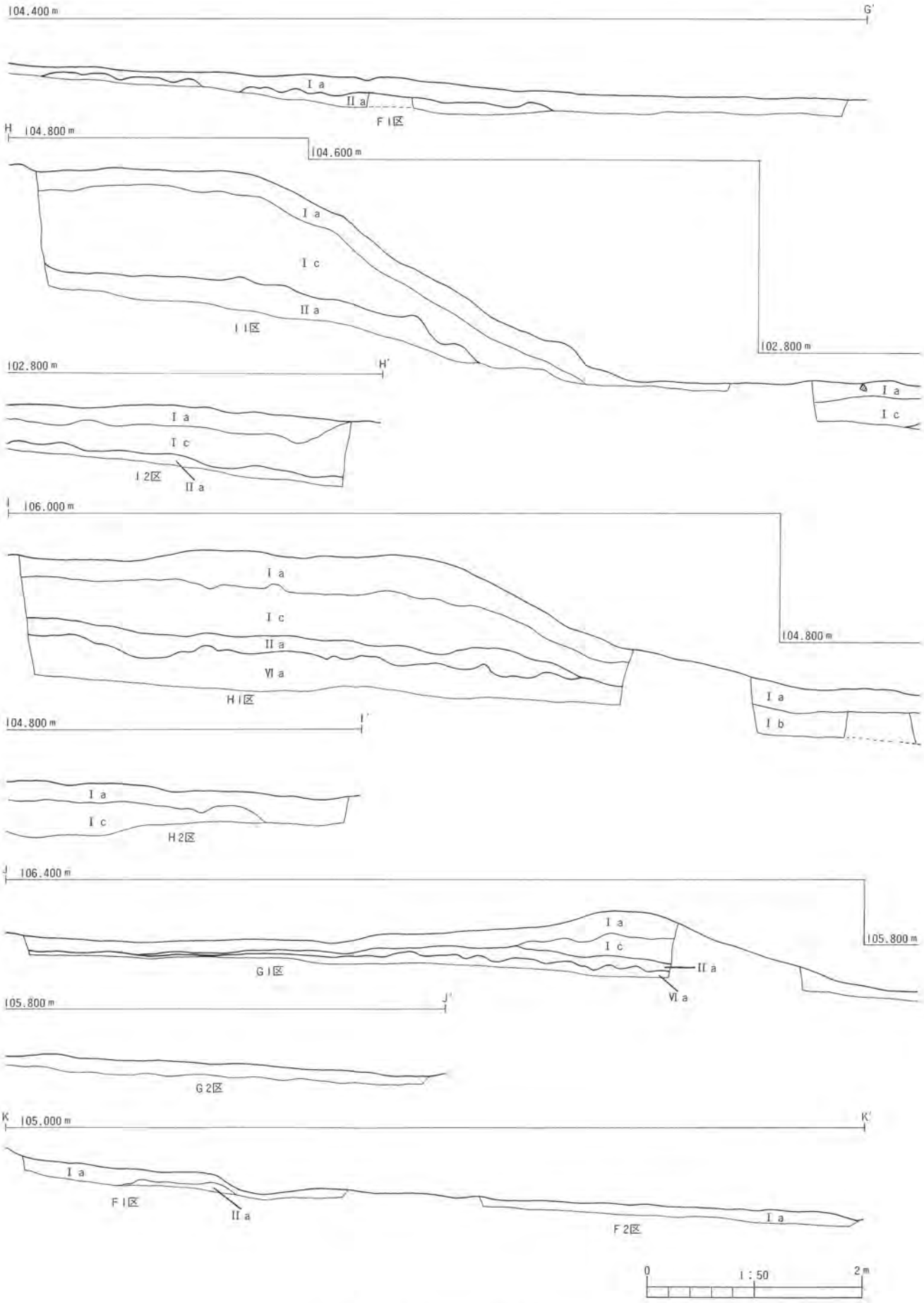
第8図　第8次調査区土層断面図(1)



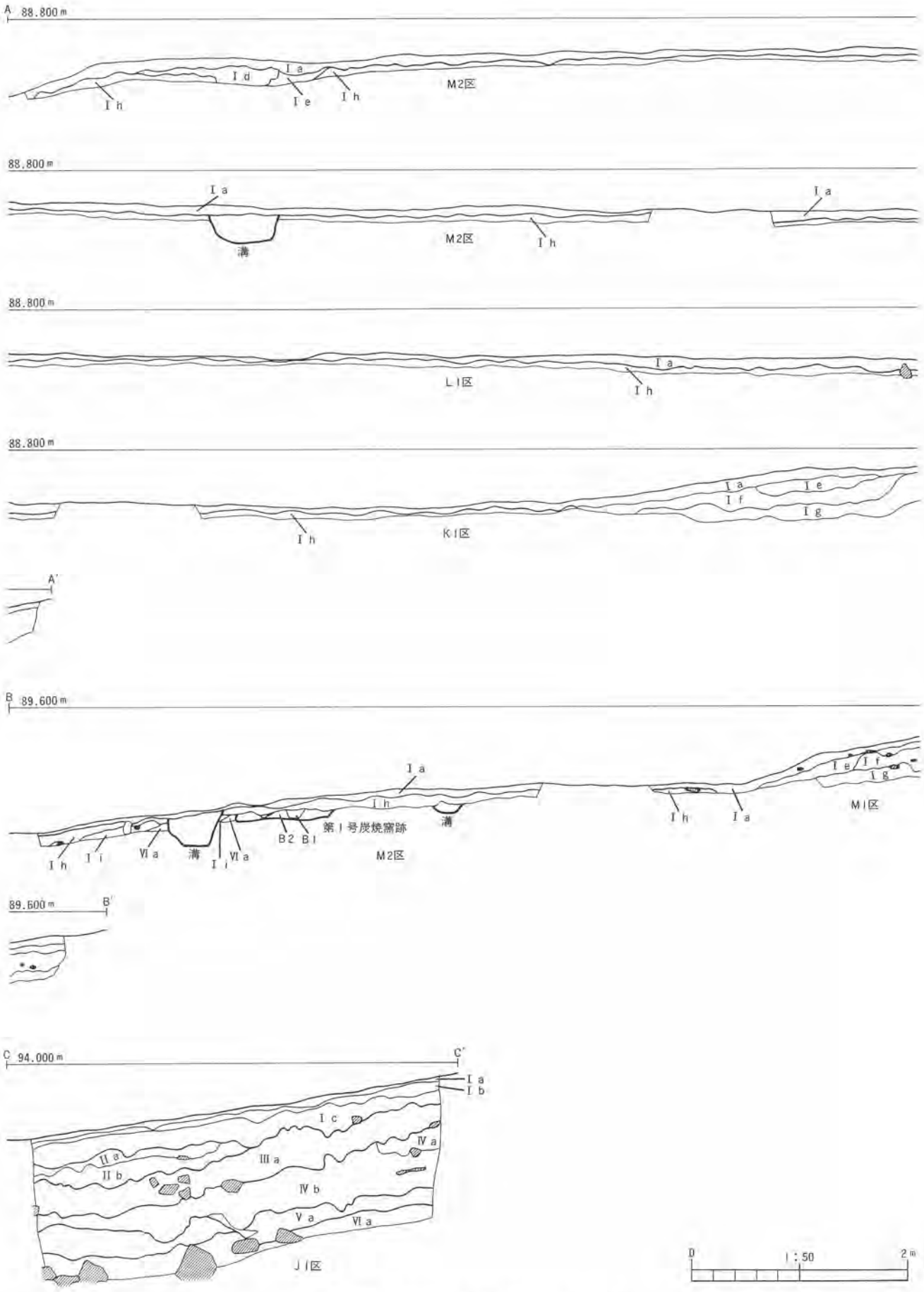
第9図　第8次調査区土層断面図(2)



第10図　第8次調査区土層断面図(3)



第11図　第8次調査区土層断面図(4)



第12図　第9次調査区土層断面図(1)

Ⅳ　層　A区・B区・J区にのみ堆積する黒褐色土層である。

Ⅳa層　J区にのみ堆積し、やや赤味を帯びた黒褐色土を基本土とし、黄褐色土魂を少量含む。固さ、しまりともに中程度である。

Ⅳb層　黒褐色土を基本土とし、やや明るい褐色土塊を少量含む。固さは中程度で、ややしまっている。

Ⅴ　層　A区・B区・J区にのみ堆積する暗褐色土層である。

Ⅴa層　暗褐色土を基本土とし、黒褐色土塊などをやや多く含む。やや固く、ややしまっている。

Ⅴb層　A区・B区にのみ堆積する。Ⅴa層に類似するがやや明るく、Ⅵ層へ漸移的に移行する。

Ⅵ　層　遺跡全体に堆積する地山層である。最上層のⅥa層は黄褐色土を基本土とし、やや固く、ややしまっている。

以上であるが、遺構のすべてはⅠ層～Ⅱ層を除去した後のⅥ層上面で検出している。

3．検出した遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡

第5号竪穴住居跡（第13図）

E2区南端に検出したもので、全体の2／3程度が調査区外となったために全容を把握することはできなかった。調査区内での平面形は不整円形を呈し、規模は南北4.35m以上、東西2.35m以上を計る。壁はややゆるやかに立上り、最深部の壁高は0.3mである。

埋土はA層とB層のみであるが、A層の上部にはⅡa層が堆積している。A1層は、やや明るい暗褐色土を基本土とし、褐色の粘土塊などを少量含むほか炭化物粒を少量含む。また、土器片等の遺物を少量含む。やや固く、しまり具合は中程度である。

B1層は褐色土を基本土とし、暗褐色土を含むほか、少量の焼土粒や微量の炭化物粒を含む。また、やや多量の土器片を含む。やや固いがややしまりがない。

床面はほぼ平坦であるが特に固い部分や貼床は認められなかった。

床面の東寄りに2基の炉を検出しており、北側から1号炉、2号炉とした。いずれも地床炉であり、床面で直接火を焚いたものである。1号炉は不整楕円形を呈し、南北0.4m、東西0.3mの範囲に焼土が認められる。2号炉もほぼ同様であるが、大半が調査区外となるため詳細は不明である。

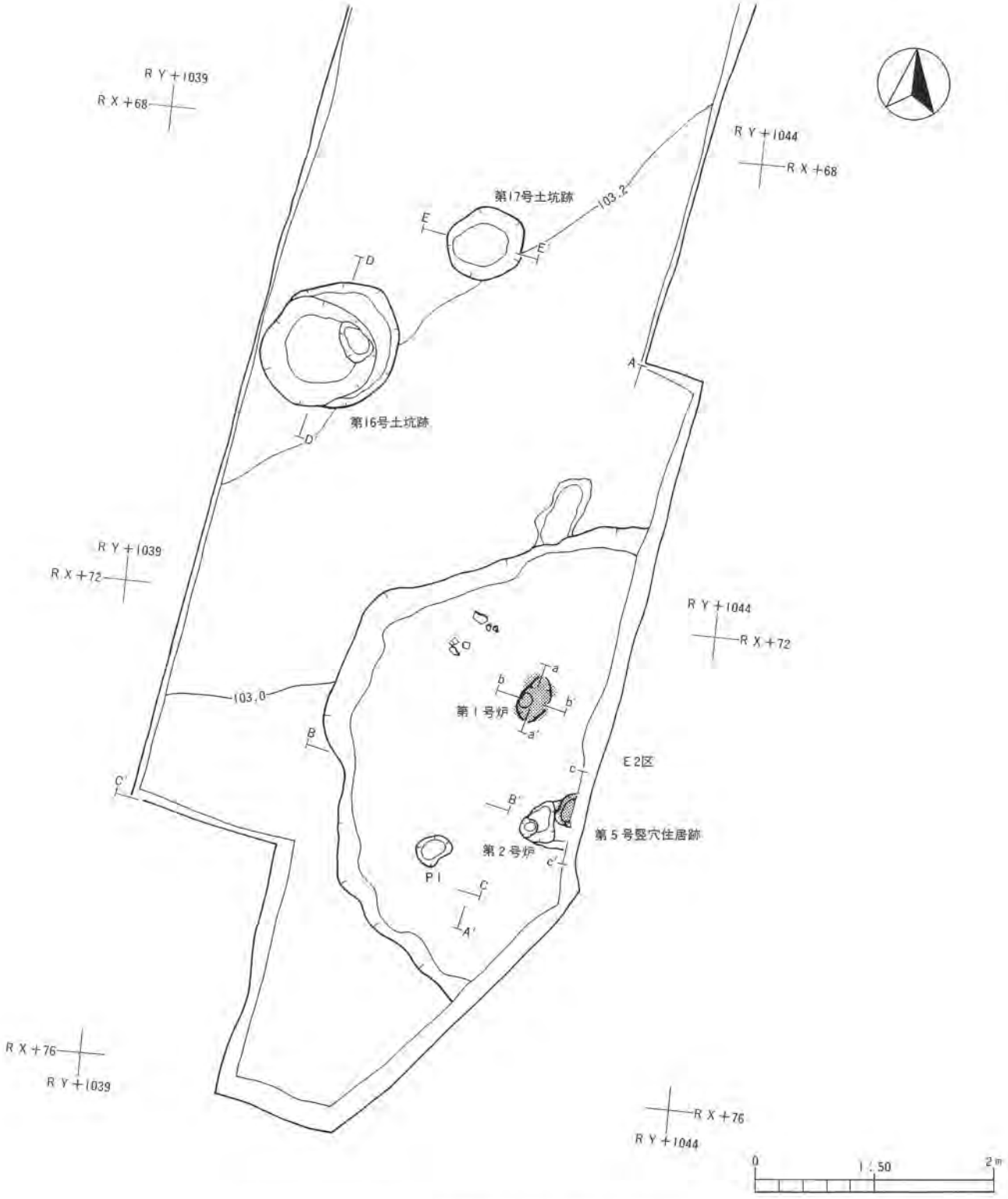
また、床面にて浅いピット（P_1）を確認したが、柱穴に相当するものではないと思われる。

出土遺物は、いずれも地文のみの縄文土器片（1～5）が出土している。口縁部がわずかに外反し、体部にわずかな膨らみを有するものである。縄文中期後半以降に伴うものであろう。

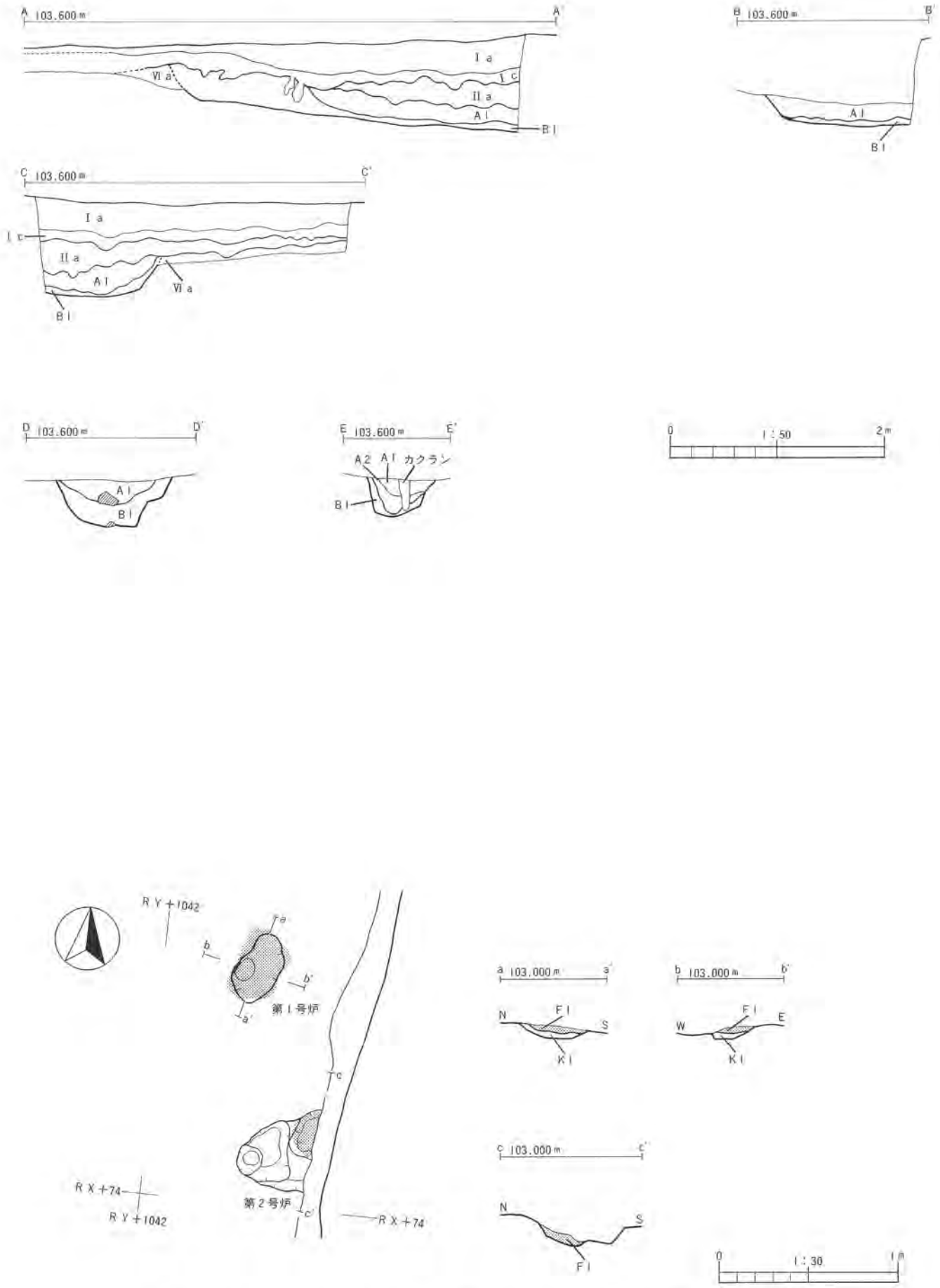
第6号竪穴住居跡（第15図）

G2区のほぼ中央部に検出した。平面形は不整の隅丸方形を呈し、規模は東西2.2m、南北2.1mを計る。壁には約45°に立上り、最深部の壁高は0.15mを計る。

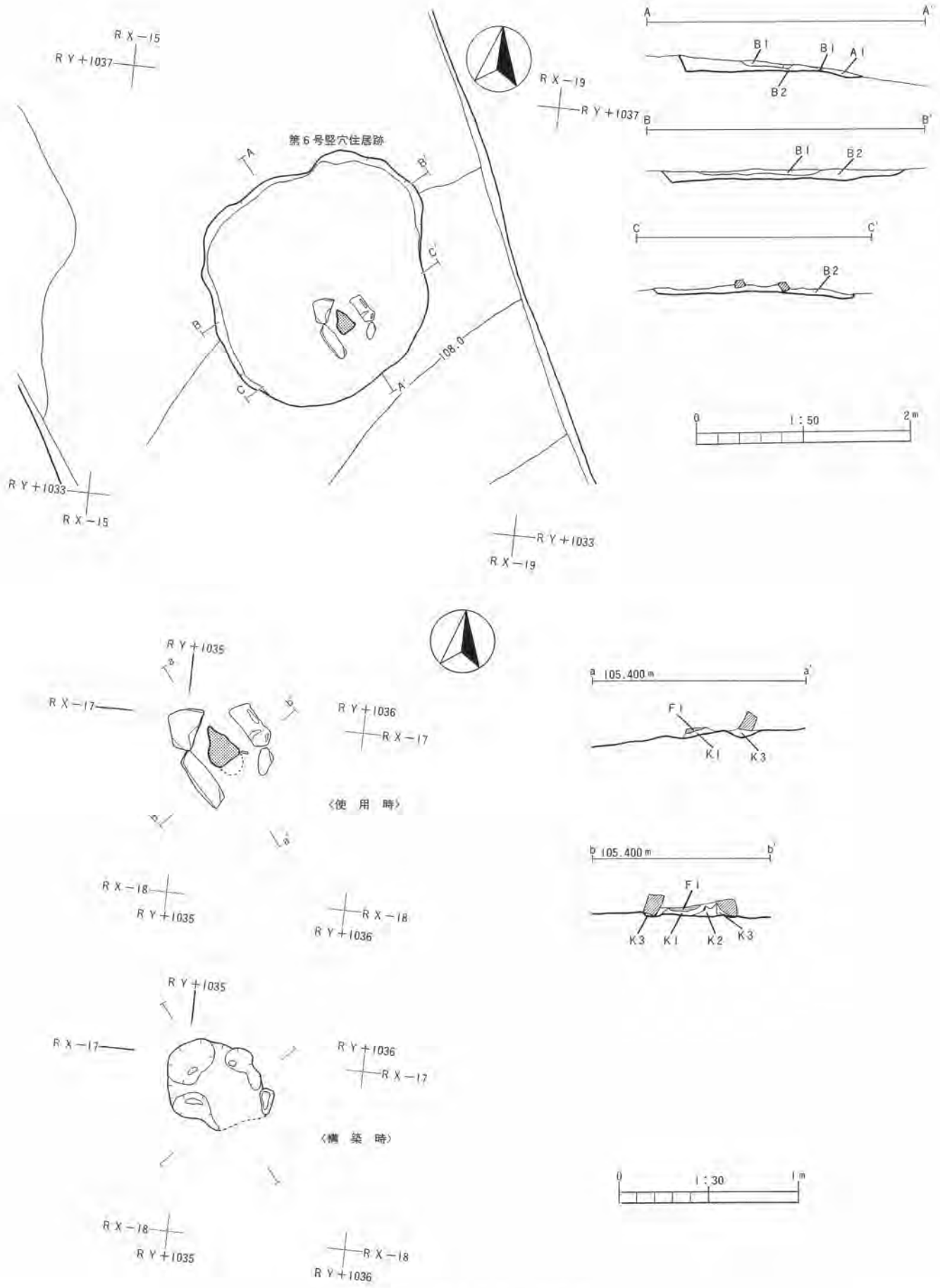
埋土はA層・B層に大別される。A1層は、やや明るい褐色土を基本土とし、少量の暗褐色



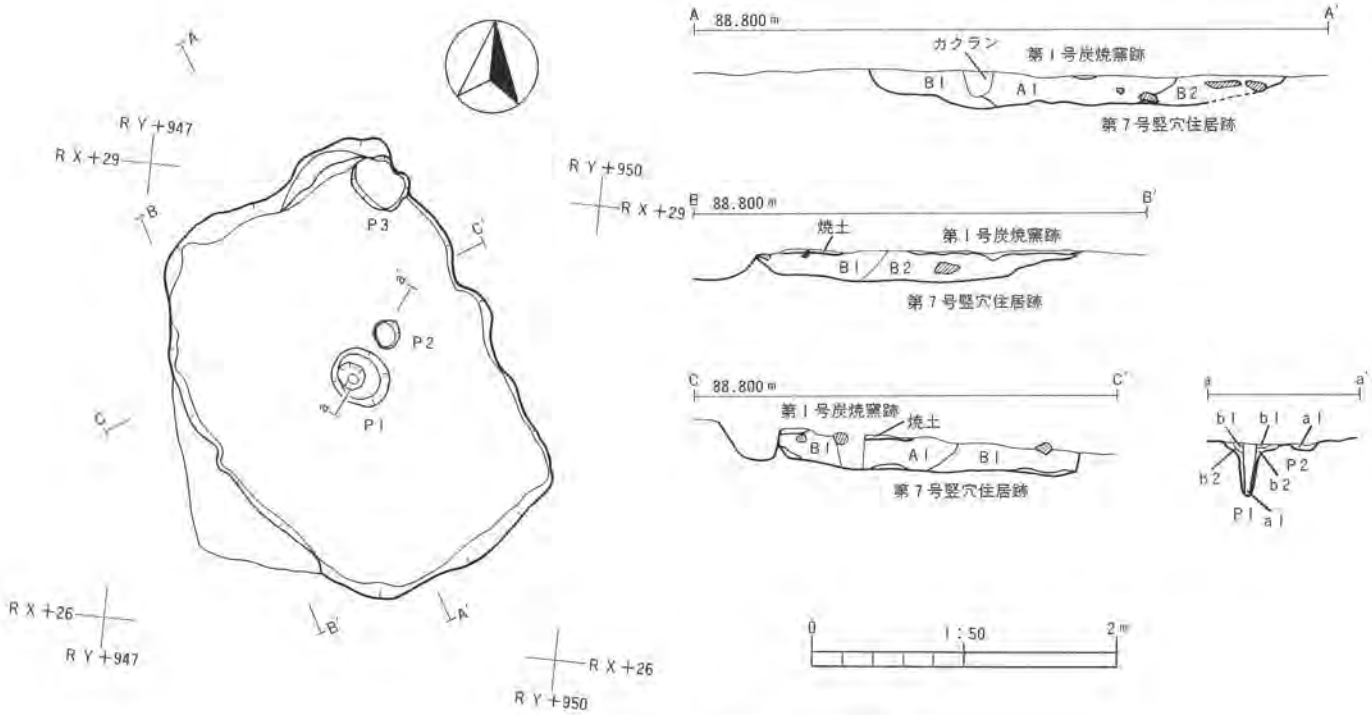
第13図　第5号竪穴住居跡・第16号土坑跡・第17号土坑跡



第14図　第5号竪穴住居跡土層断面図、炉・第16号土坑跡、第17号土坑跡土層断面図



第15図　第6号竪穴住居跡



第16図　第７号竪穴住居跡

土塊を含む。固さは中程度で、ややしまりがない。

Ｂ１層は、暗褐色土を基本とし、少量の褐色土塊を含む。固さは中程度で、ややしまりがない。Ｂ２層は、Ｂ１層よりやや明るい暗褐色土を基本土とし、多量の褐色土塊等を含む。やや柔らかく、ややしまりがない。

床面はほぼ平坦であるが、特に固い部分や貼床は認められなかった。

床面の中央よりわずかに南寄りに炉を検出している。炉は石囲炉で、東西0.5ｍ、南北0.6ｍを計る。長さ20～40ｍ程度の亜角礫４個を方形に配するものであるが、北辺と南辺の炉石が欠落しており、おそらくは抜きとられたものと思われる。

炉の中心部には、東西0.15ｍ、南北0.25ｍ程の焼土が認められ、比較的良く焼成を受けている。

尚、炉の構築方法は、炉よりひとまわり大きな浅い掘り方を掘り、炉石のすえ方を掘った後に炉石をすえて、褐色土等（Ｋ層）をつめている。

出土遺物は極めて少ないが、炉の構築土中から７が出土している。７は浅鉢か坏等の体部破片であり、赤褐色を呈し焼成は良好である。外面に横位２条の沈線がめぐっている。弥生時代前期の砂沢式に伴うと思われる。

第７号竪穴住居跡（第16図）

Ｌ１区の北半部に検出した。第１号炭窯跡と重複し、これに切られる。

平面形は不整の隅丸方形を呈し、北東隅にわずかな張り出しが認められる。規模は東西2.1ｍ、

南北2.9mを計る。壁はほ直壁で、最深部の壁高は0.2mを計る。

埋土はA層・B層に大別される。A1層は暗褐色土を基本とし、褐色土塊を少量含む。やや固く、しまり具合は中程度である。

B1層は褐色土を基本土とし、やや明るい褐色土塊を微量含む。B2層はB1層より明るい褐色土を基本土とし、暗褐色土塊を微量含む。いずれもやや固く、しまり具合は中程度である。

床面はほぼ平坦であるが、外側から中心部にかけてわずかに落込んでいる。特に固い部分や貼床は認められなかった。また、調査区内に炉は認められなかった。

柱穴は床面のほぼ中央にP1が、P1の東隣りにP2が、張り出し部にP3が検出された。

P1は開口部径0.35m、深さ0.35mを計り、断面形は漏斗形を呈するもので、主柱穴に相当する。埋土はa1層が柱痕跡に相当し、褐色土を基本土とし、黄褐色土塊を少量含む。やや固く、ややしまっている。b層は掘り方に相当し、b1層は褐色土を基本土とし、黄褐色土を微量含む。b2層は黄褐色土を基本土とする。いずれもやや固く、ややしまりがある。

P2・P3は浅く、柱穴に相当するものではないと思われる。

出土遺物

134～138は地文のみを施す縄文土器片である。138のみは単節斜縄文を地文とするが、134～136はいずれも組縄縄文を地文としている。134は口縁部の破片であるが、わずかに外反しており、口唇部への施文は認められない。これらは縄文前期初頭の大木1式に伴う。

174・176～179・182・184は石器である。174は無柄平基の三角鏃であり、両面ともに丁寧に調整されている。176は欠損品であるが174に類似するものであろう。背面の調整は比較的粗雑であり、主要剥離面を大きく残す。

177は断面三角形のブレード状剥片を使用するもので、上半部（機能部）と基部にやや粗雑な調整が認められる。所謂石刃鏃に類似する。

178・179は縦形石匙である。いずれも一方の側縁に直線状の、もう一方に膨らみを持つ刃部を有している。

182磨石である。やや扁平な自然円礫の一側縁を使用するもので、磨面には擦痕が認められる。

184は礫器である。自然円礫を上下方向から加撃し、大き目の剥離を施した後に左右方向から小さ目の剥離を施している。

第８号竪穴住居跡（第17図）

Ｍ１区のほぼ中央部に検出した。斜面の下半部（東半部）が流失しており、全体の1／2程度が現存している。平面形は不整円形か不整楕円形を呈するものと思われ、規模は北西－南東方向で3.7ｍ以上、北東－南西方向で1.9ｍ以上を計る。壁はややゆるやかに立上り、最深部の壁高は0.08ｍを計る。

埋土はＡ層とＢ層に大別される。Ａ１層は暗褐色土を基本土とする。やや固く、しまり具合は中程度である。

Ｂ１層は褐色土を基本土とし、明褐色土塊を少量含む。やや固く、しまり具合は中程度である。

床面はほぼ平坦であるが、特に固い部分や貼床は認められなかった。

現存する床面の東辺部に炉が検出された。炉は地床炉であり、平面形はヒョウタン形をしている。南半部をⅠ部、北半部をⅡ部とする。Ⅰ部は東西0.45ｍ、南北0.3ｍの不整楕円形の範囲に焼土が認められ、中心部の直径0.25ｍの範囲が特に良く焼成を受けており固くしまっている。Ⅱ部は東西0.25ｍの不整楕円形の範囲に焼土が認められ、この大部分が良く焼成を受けて固くしまっている。土層断面観察の結果、Ⅰ部とⅡ部は同時に機能したものと判断した。

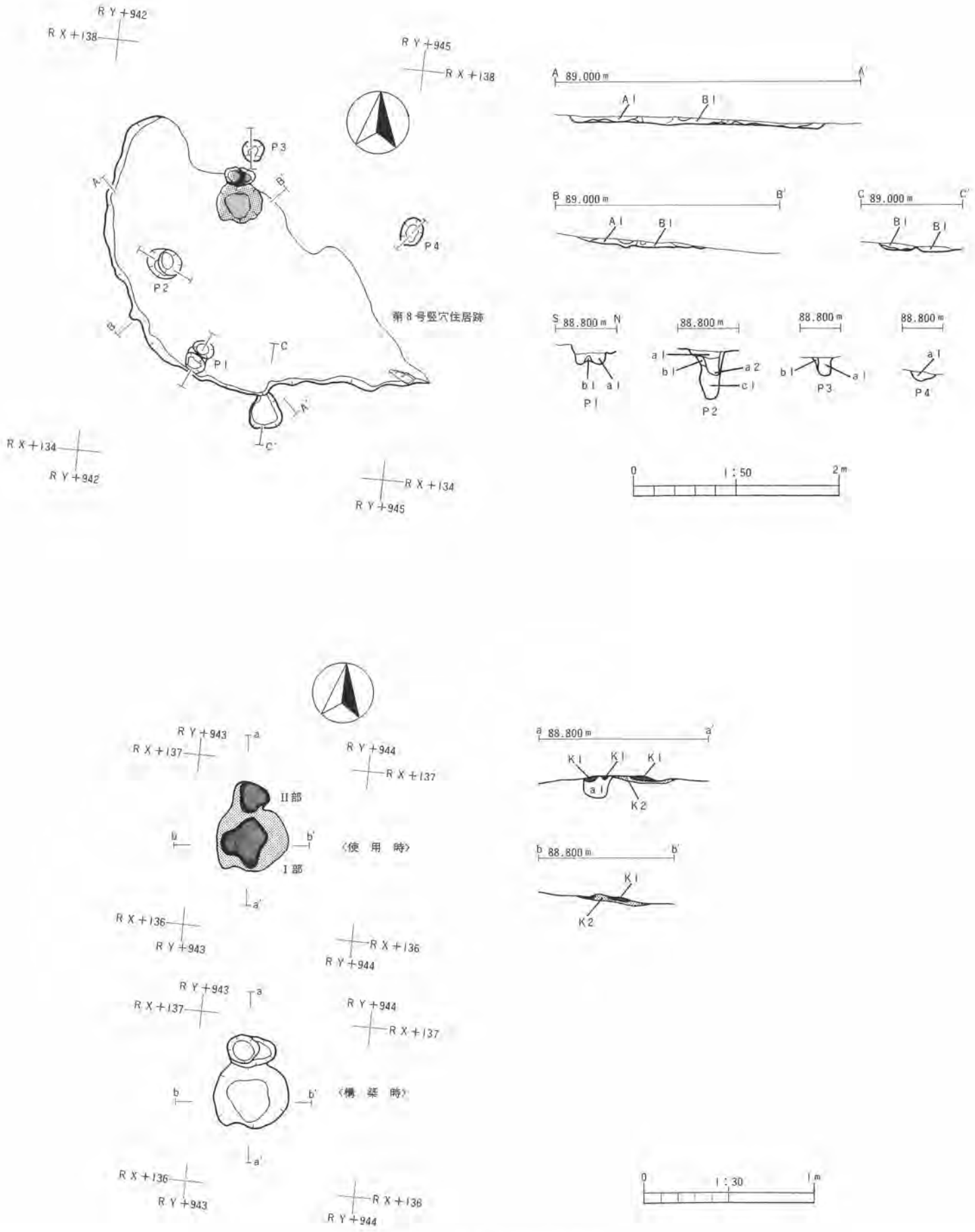
床面および東側にＰ１～Ｐ４を検出している。このうちＰ２とＰ３は柱痕跡を確認しており、主柱穴に相当するものであろう。Ｐ４は柱痕跡を確認できなかったが、やはり主柱穴に相当するものであろう。Ｐ１は掘り込みが浅く、形も不整形であることから主柱穴ではないかと思われる。おそらくはＰ１より東側にもう１基の主柱穴が存在し、四本柱になるものと思われるが、検出することはできなかった。

柱間寸法は各々芯々で、Ｐ２とＰ３が1.4ｍ、Ｐ３とＰ４が1.75ｍとなる。

出土遺物は少ない。139は床面上から出土した小形鉢である。底部から体部にかけてほぼ直線的に立上がり、口縁部がわずかに内彎している。外面の器面全体には沈線により縦位楕円形区画文や渦巻文の退化したものなどが施文される。沈線間は磨消されないために地文が残っている。この他には隆沈線で施文されるものなどがある（140～143）。

175は無柄平基の三角鏃である。側縁部の下半にはわずかな膨らみが認められる。両面とも比較的丁寧に調整されている。

181は欠損品であるが扁平自然礫の側縁を使用する敲打磨石である。



第17図　第8号竪穴住居跡

(2) 土坑跡

第12号土坑跡（第18図）

Ｄ１区南半部に検出した。全体の1／3程度が調査区外となるが、平面形は不整円形を呈すものと思われる。規模は東西1.0m以上、南北1.2mを計る。断面形はビーカー状を呈し、壁はほぼ直壁で、壁高は0.35mを計る。

埋土はＡ層～Ｄ層に大別される。Ａ１層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊等をやや多く含むほかに炭化物粒を少量含む。柔らかく、しまり具合は中程度である。

Ｂ１層は褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などをやや多く含む。柔らかく、ややしまりがない。

Ｃ１層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを多量に含む。やや柔らかく、ややしまりがない。

Ｄ１層は褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などを多量に含む。柔らかく、ややしまりがない。出土遺物は無い。

第13号土坑跡（第18図）

Ｄ１区南半部に検出した。一部調査区外となるが、平面形は不整楕円形を呈すものと思われる。規模は東西0.65m以上、南北0.55mを計る。断面形は不整なビーカー状を呈し、南壁はほぼ直壁で、北壁はゆるやかに立上がる。壁高は0.1mを計る。

埋土はＡ層・Ｂ層に大別される。Ａ１層は粘性のある暗褐色土を基本土とし、褐色土塊を少量含む。柔らかく、ややしまりがない。

出土遺物は無い。

第14号土坑跡（第18図）

Ｅ１区中央部に検出した。平面形は不整円形を呈し、規模は東西1.45m、南北1.4mを計る。

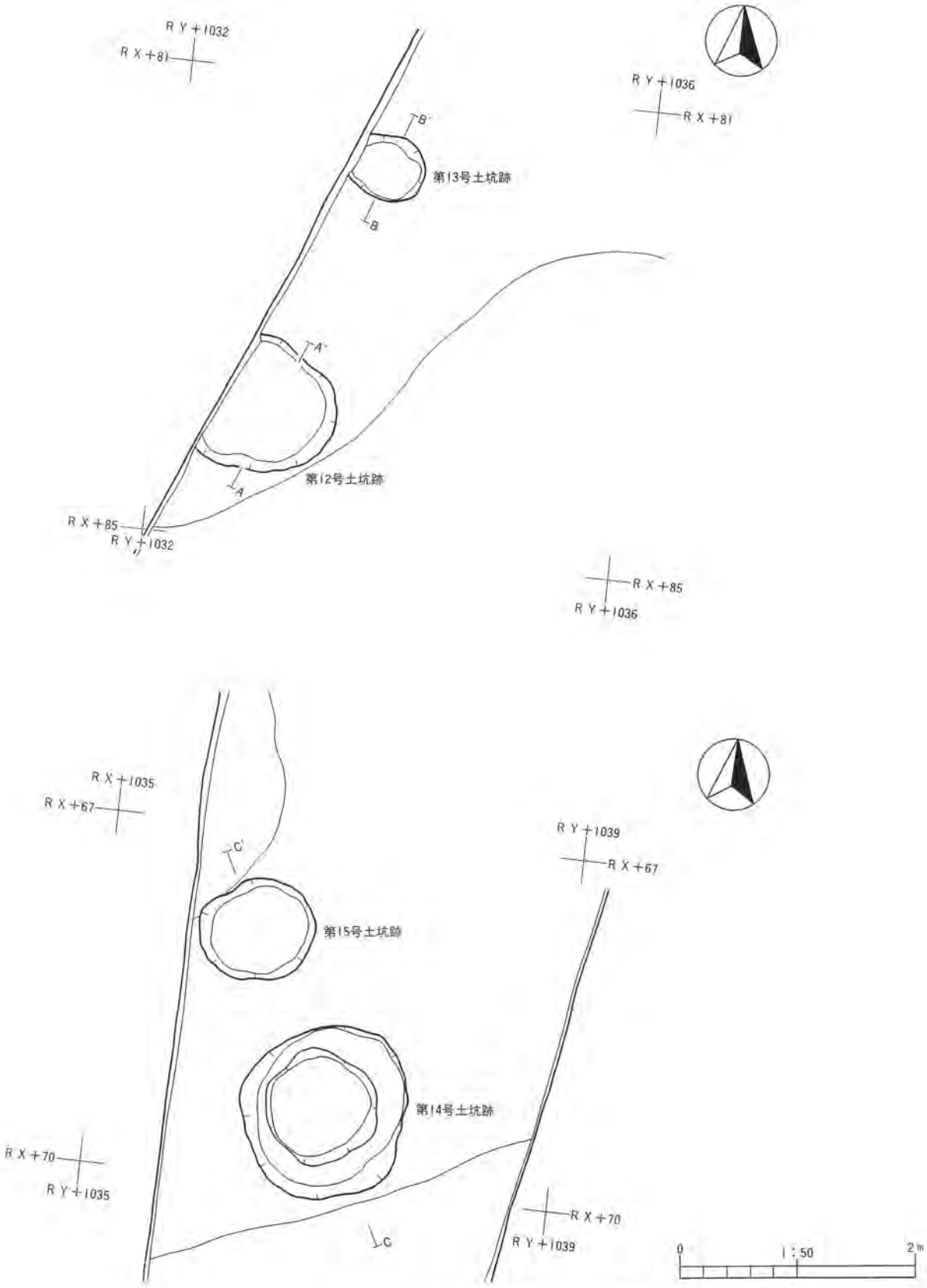
断面形は底面の中央部が一段低く掘り下げてあるために、２段掘りになっている。上段の壁はやや外傾気味に立上がり、壁高は0.35mを計る。下段の壁はややゆるやかに立上がり、壁高は0.1mを計る。

埋土はＡ層～Ｃ層に大別される。Ａ１層は褐色土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊をやや多く含む。固く、しまり具合は中程度である。

Ｂ１層は黒褐色土を基本土とし、褐色土塊や暗褐色土を含む。固さは中程度で、ややしまりがない。Ｂ２層はＢ１層より明るい黒褐色土を基本土とし、褐色土塊や暗褐色土塊を含むが、Ｂ１層より混入量がやや多い。固さは中程度で、ややしまりがない。また、Ｂ１層・Ｂ２層ともに炭化物粒を少量含む。

Ｃ１層はやや明るい暗褐色土を基本とし、褐色土塊等を多く含む。やや固く、しまり具合は中程度である。Ｃ２層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊や黒褐色土塊を少量含む。やや固く、しまり具合は中程度である。Ｃ３層はやや明るい暗褐色土を基本土とし、褐色土塊等を多く含むが混入量はＣ１層より少ない。やや固く、しまり具合は中程度である。

尚、遺物は各層から出土しているが、特にＢ１層とＢ２層に集中する傾向が認められた。



第18図　第12号～第15号土坑跡

出土遺物

8は口縁部が外傾気味に立上がる深鉢の口縁部破片である。口縁部文様帯に3条の平行沈線にて波状文を施した後に、やはり平行沈線にて弧状文を施している。この文様帯の上下には撚りの細かい縄文を横方向に回転させた縄文帯が認められる。また、口唇部と内面の口縁部付近にも縄文が施されている。

9は小形つぼの口縁部破片である。口縁部文様帯には交互刺突文が施されている。

10・12・13・14は地文のみを施す体部～低部破片である。これらはいずれも中段に8に類似する横位の縄文帯を有し、この上下（14は上のみ）に縦位の撚糸文を施すものである。特に10は撚糸文の間隔を意識的に空けるなど装飾的効果をねらっているものと思われる。

11・16も前述したものに類似するが、中段に横位の縄文帯を持たず、地文の施文方向を変えただけのものである。他のものは単一方向にのみ地文を施すものである。

これらは弥生時代後期の天王山式に伴うものと思われる。

183は砂岩質の石材を使用するもので、一方の面には凹石状の凹部と敲打痕が認められ、もう一方の面には平坦な磨面があり、使用痕と思われる擦痕が認められる。

第15号土坑跡（第18図）

Ｅ１区東半部に検出した。平面形は不整円形を呈し、規模は東西0.85m、南北1.0mを計る。

断面形は不整なビーカー状を呈し、西壁付近がほぼ直上に、東壁付近がややゆるやかに立上がる。壁面は最深部で0.2mを計る。

埋土はＡ層～Ｃ層に大別される。Ａ１層は褐色土を基本とし、暗褐色土塊等を少量含む。固く、しまり具合は中程度である。

Ｂ１層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊を少量含む。やや固く、ややしまりがない。

Ｃ１層は褐色土を基本土とし、暗褐色土塊等をやや多く含む。固く、しまり具合は中程度である。

出土遺物は無い。

第16号土坑跡（第13図）

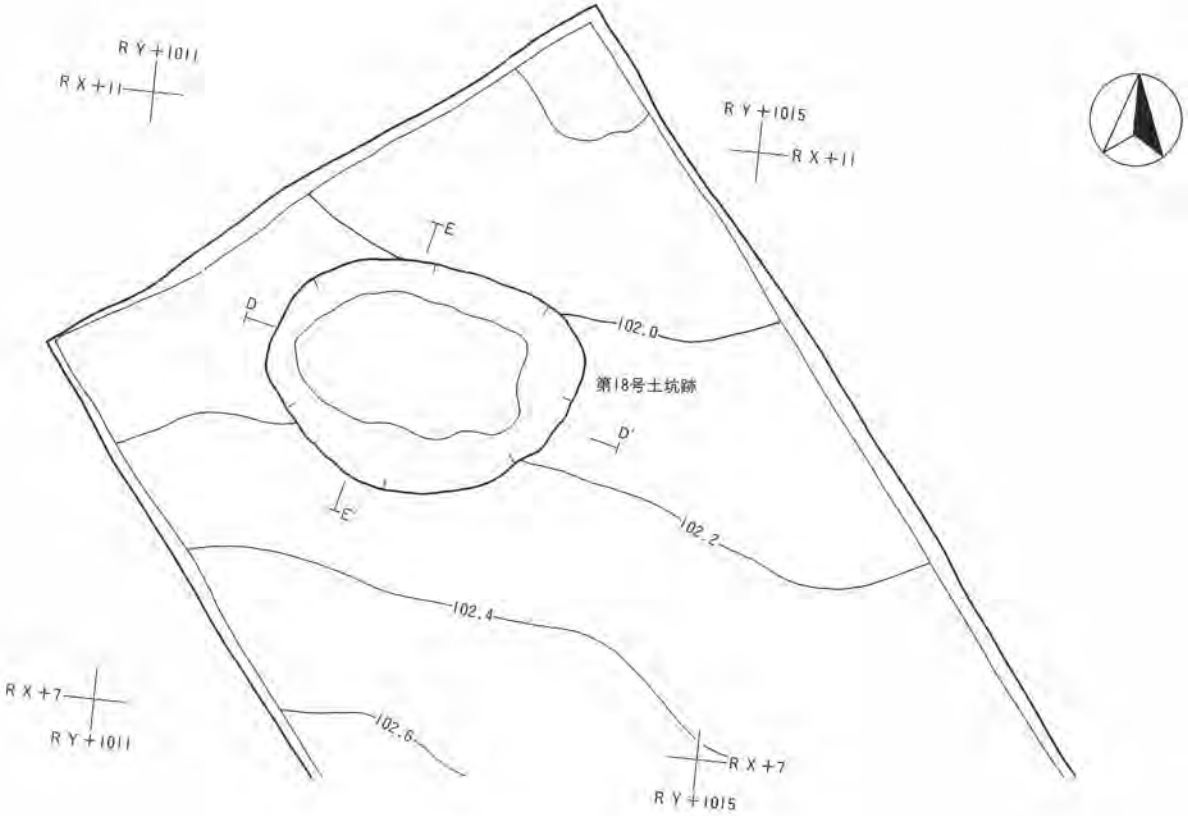
Ｅ２区中央部に検出した。平面形は不整円形を呈し、規模は東西1.15m、南北1.1mを計る。

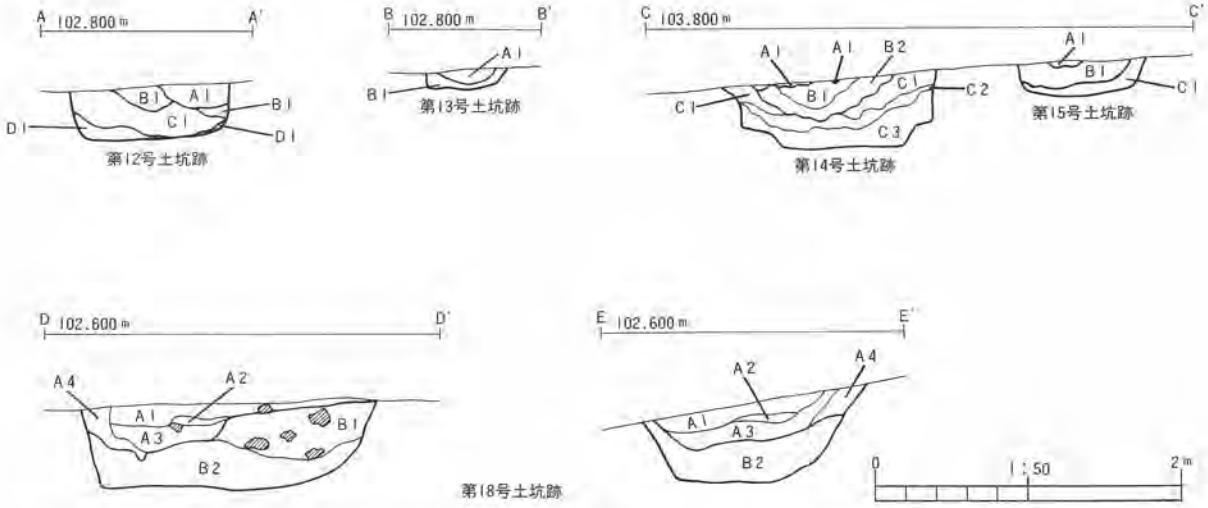
断面形は底面の一部が更に一段低く掘り下げられてあるために、２段掘りになっている。上段、下段ともに壁はややゆるやかに立上がり、壁高は上段で0.15m程度、下段で0.25m程度となる。また、下段の底面の東端に不整形の小ピットが伴う。

埋土はＡ層・Ｂ層に大別される。Ａ１層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊をやや多く含む。やや固く、しまり具合は中程度である。

Ｂ１層は褐色土を基本土とし、暗褐色土塊等をやや多く含む。固さは中程度で、ややしまりがない。

出土遺物は無いが、平面及び断面の形態が第14号土坑跡に類似するため、これと同時期の可能性が想定される。





第19図　第18号土坑跡・第12号～第15号、第18号土坑跡土層断面図

第17号土坑跡（第13図）

Ｅ２区中央部に検出した。平面形は不整円形を呈し、規模は東西0.65m、南北0.6mを計る。

断面形は擂鉢形に近く、壁はややゆるやかに立上がる。最深部の壁高は0.35mを計る。

埋土はＡ層・Ｂ層層に大別される。Ａ１層は褐色土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。固く、ややしまっている。Ａ２層はやや粘性のある暗褐色土を基本土とし、褐色土塊を少量含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。

Ｂ１層はやや明るい褐色土を基本土とし、暗褐色土塊を少量含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。

出土遺物は無い。

第18号土坑跡（第19図）

Ｉ２区北端部の比較的斜度のある斜面上で検出した。平面形は不整楕円形を呈し、規模は東西2.1m、南北1.5mを計る。

断面形は擂鉢形に近く、壁はゆるやかに立上がる。最深部の壁高は0.5mを計る。

埋土はＡ層・Ｂ層に大別される。Ａ１層は黒褐色土を基本土とし、黒色土塊などを多く含む。固さは中程度で、ややしまっている。少量の炭化物粒を含む。Ａ２層はやや明るい黒色土を基本土とし、黒褐色土塊をやや多く含む。固さは中程度でどで、ややしまっている。少量の炭化物粒を含む。Ａ３層は黒褐色土を基本土とし、暗褐色土塊等を多く含む。やや固く、ややしまりがない。微量の炭化物粒を含む。

Ｂ１層は黒色土を基本土とし、黒褐色土塊を多く含む。やや柔らかく、しまりがない。炭化物を多く含むが、上部では小塊状なのに対し、下部では材が残っている。Ｂ２層は黒色土を基本土とし、褐色土塊と暗褐色土塊を多く含む。柔らかく、しまりがない。極めて多量の炭化物を含むが、大半は塊状となっており、材は含まない。

出土遺物

22～25は埋土中から出土した縄文土器片である。23はつぼ形を呈するもので、屈曲部に横位の沈線が施される。22・24・25は体部の破片であるが、いずれも隆沈線による施文が認められる。

(3) その他の遺構

第１号炭焼窯跡（第20図）

Ｌ１区北端部からＭ１区南端部にかけて検出した。第７号竪穴住居跡を切り、溝跡群に切られる。平面形は不整な隅丸長方形～長楕円形を呈し、規模は、長軸5.45m、短軸1.15mを計る。壁はゆるやかに立上がり、壁高は最深部で0.05mを計る。

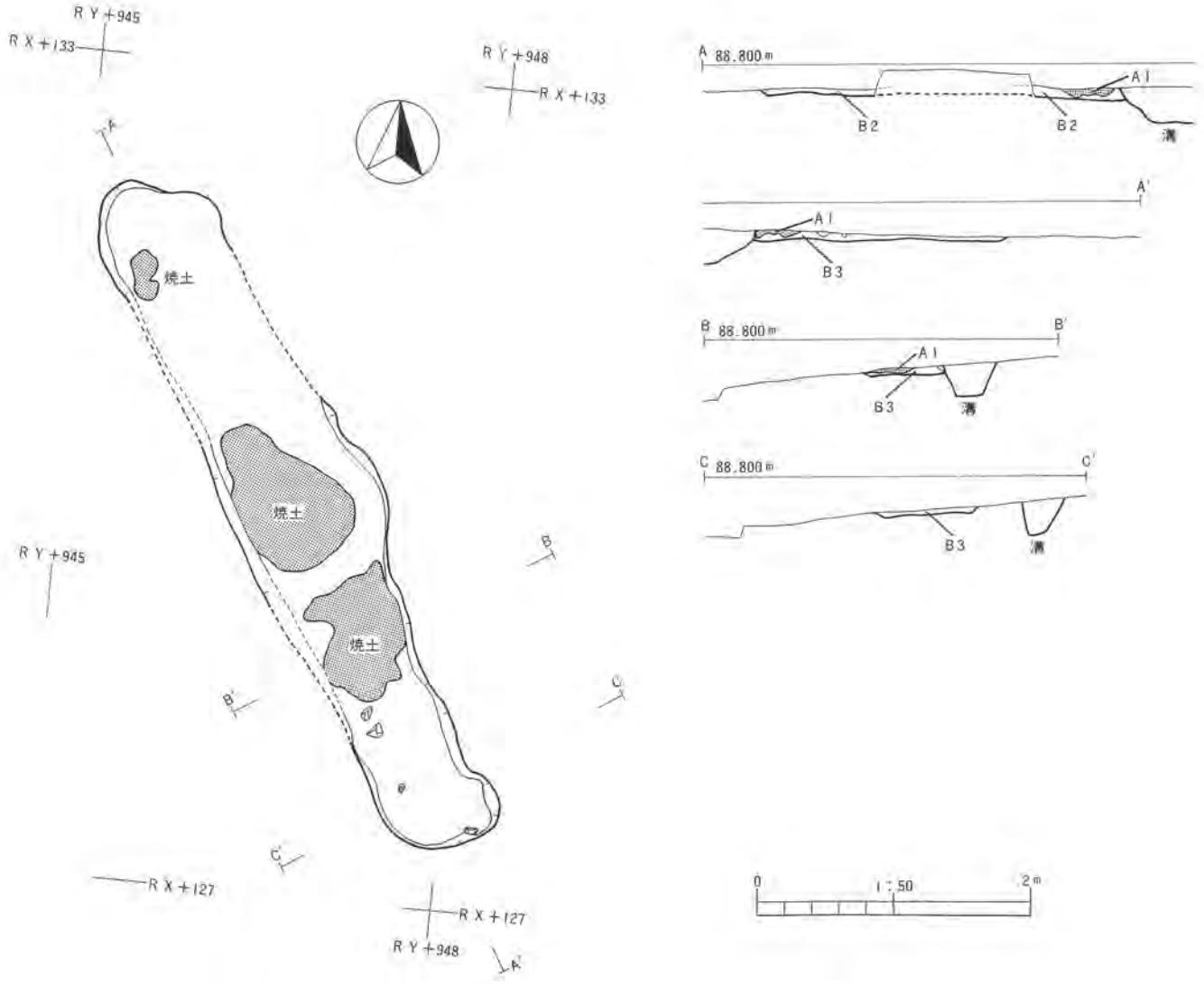
底面はほぼ平坦であり、全体に固くしまっている。また、中央部と北端部付近では底面の焼成による焼土が認められた。

埋土はＡ層・Ｂ層に大別される。Ａ１層は赤褐色を呈する焼土層で、固く、しまっている。尚、本層の上面には部分的に薄い炭化物層が認められた。

Ｂ１層は明褐色土を基本土とし、基本土より暗い明褐色土塊を微量に含むほかに多量の炭化

物粒を含む。Ｂ２層は褐色土を基本土とし、黄褐色土塊を微量含むほかに少量の炭化物を含む。
Ｂ１層・Ｂ２層ともにやや固く、ややしまっている。

出土遺物は無い。



第20図　第１号炭焼窯跡

(4) 遺構外出遺物

遺構外から出土した遺物は縄文時代～弥生時代に伴う土器と石器が主体となる。第８次調査のＨ区～Ｉ区にかけてやや出土量が多くなる傾向が認められたものの、時に遺物包含層を形成しているわけではないので一括して扱うこととする。

土器（第22図～第24図）

第８次調査にて遺構外から出土した土器は層位的共伴関係を持たないものであるため、既に設定されている土器型式に対応させて説明する。

Ｉ群　縄文前期に伴うもの（26～36）を一括したが、施文技法等により次のとおり分類が可能である。

Ｉａ群　（33・34）

いずれも胎土に植物繊維を含む体部破片である。磨滅により不明瞭ではあるが、地文として斜行縄文を施した後に横位の原体圧痕文を数段施している。

Ｉｂ群　（30～32）

いずれも胎土に植物繊維を含む。いずれも押し引き沈線文を平行に施文している。30・31は低部付近の破片である。

32も押し引き沈線文により施文されるが、各々が平行とならずにやや複雑なモティーフとなっている。

Ｉｃ群　（26～29）

いずれも胎土に植物繊維を含む体部破片である。27・28は横方向に展開する結束のある羽状縄文を地文としている。26・29は単節斜縄文を地文とするものである。

Ｉｄ群　（35・36）

いずれも胎土に植物繊維を含まない体部破片で、網目状撚糸文を地文とする。

Ⅱ群　（37～42）

37～42はいずれも口縁部を肥厚させ、この上に原体圧痕文を刻目状に施すものである。器形は口縁部が真直に外傾するもの（37）、外反するもの（38）、内彎するもの（40）の３者がある。42はやや粗い調整の隆起線により施文されるものである。

Ⅲ群（43～100）

隆沈線や平行沈線により渦巻文や懸垂文などを施文するもので、今回最も出土量が多かった。いずれも破片であり器形を明らかにできないが、口縁部は内彎するものが主体となる。

43～45・47・49・50・53・56～74は口縁部から体部に大小の渦巻文を施すものである。

75～95は懸垂文や横位に施文されるものなどであるが、前述した渦巻文と連結して一体となって施文されたものである可能性が大きい。

96～99は平行沈線により施文されるが、沈線間は磨消されない。モティーフは前述したものに類似する。

100は地文のみを施すものであるが、本群に伴うものと思われる。

Ⅳ群（101・102）

いずれも磨消技法により施文される体部破片である。101は隆起線により区画された区画文の外側を磨消している。102は沈線により区画された縦位区画文の外側を磨消すものである。

Ⅴ群（103）

1点のみであるが、103は横位の連鎖状文を施す体部破片である。

Ⅵ群（104～119・125・129）

Ⅲ群に欠いで出土量が多かった。本群は赤褐色～灰褐色の色調を呈し、白色鉱物を含むものが主体を占め、器面はミガキ等により丁寧に調整されている。破片が多く器形を明らかにし得ないが、おおむね高坏か鉢を主体とする様である。

104は高坏か鉢の体部であり、体部上半に変形工字文や平行沈線文による文様帯を有している。変形工字文の連結部に施される粘土瘤は極めて痕跡的であり、場所によっては片方を省略する例も認められる。

105～113は104に類似するものの口縁部破片である。口縁部形態は平縁で内彎気味のものが主体となる。外面の文様帯には平行沈線文などが施文され、口縁部内部にも1条の沈線を施すものが主体となる。

114・115も前述したものに類似するが、114は強く外反するもので、115は外反気味にかなり急に立ち上がるものである。115の変形工字文に施される粘土瘤もかなり痕跡的なものとなっている。

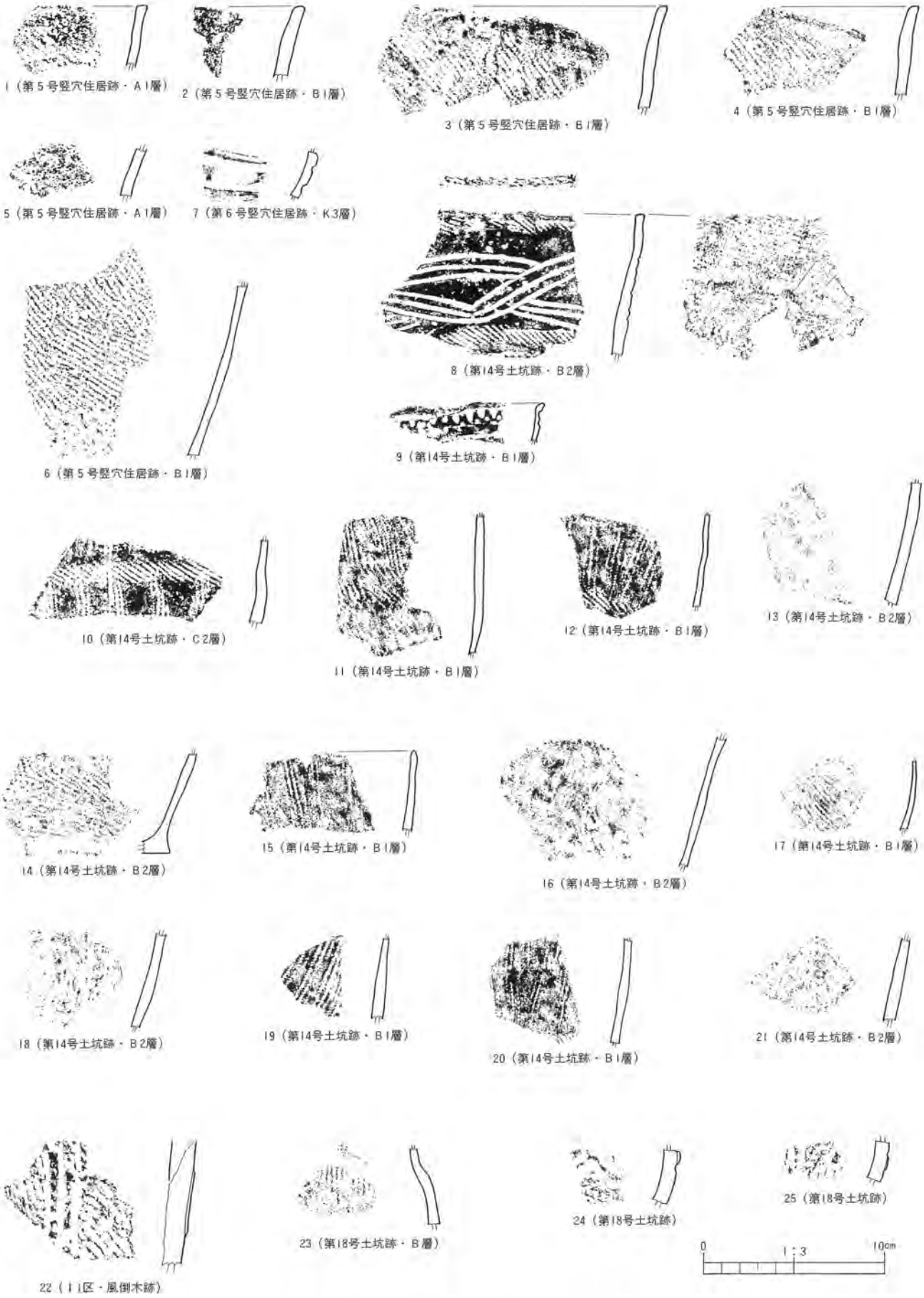
116～118は前述したものに類似する体部破片である。125はやや厚手であるが胎土は類似している。129は無文の壺と思われるものの体部破片である。

119は口縁部が外反する甕であるが、やはり本群に伴うものであろう。

Ⅶ群（120～124・126～128）

Ⅵ群に比してやや軟質であり、器面調整もやや粗雑である。

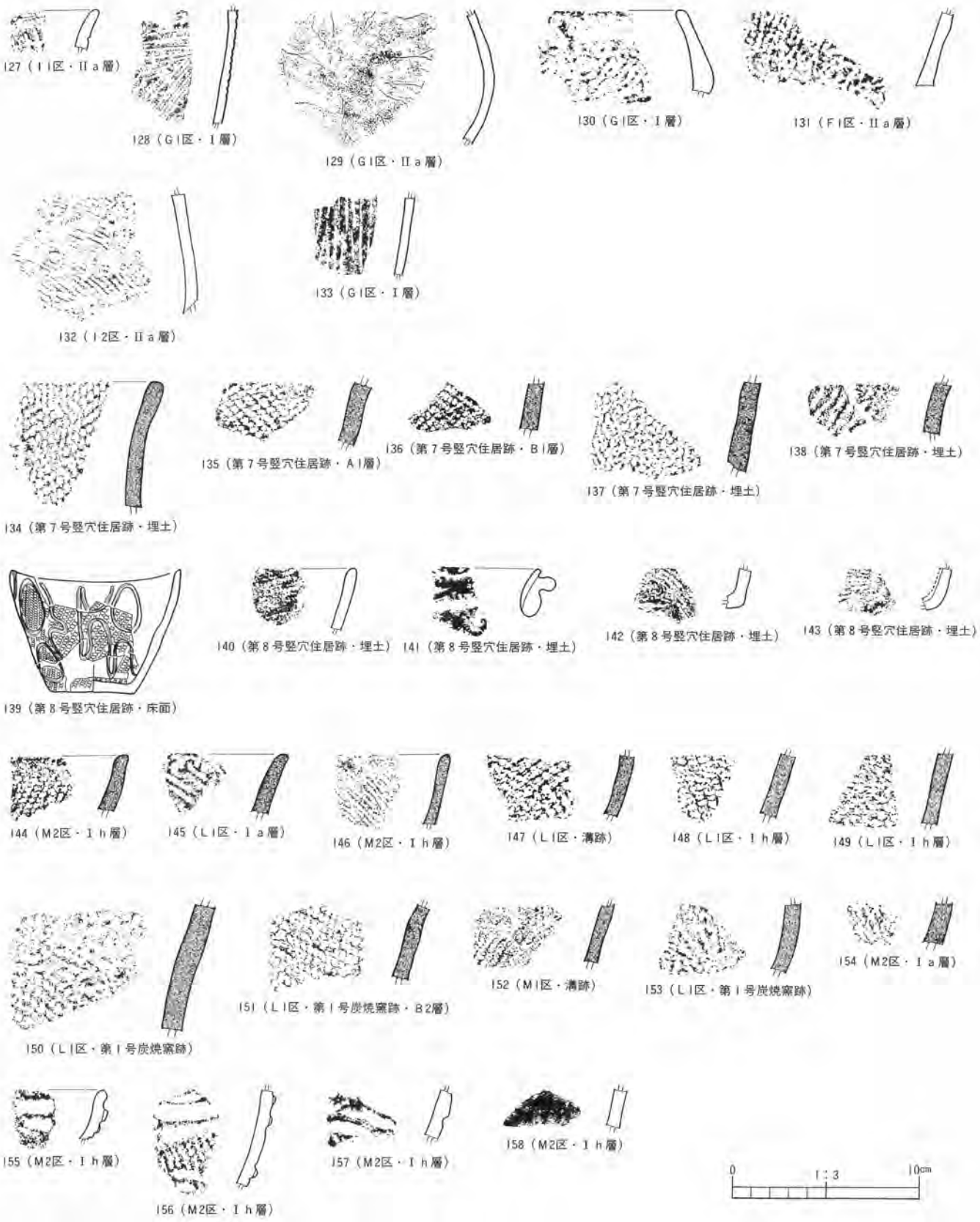
120は厚手の体部破片で、幅の狭い横位の沈線文と交互刺突文を施す。128はモティーフは不明ではあるが、120に類似した幅の狭い沈線による施文が認められる。



第21図　第８次調査区出土土器(1)

第22図　第８次調査区出土土器(2)

第23図　第８次調査区出土土器(3)



第24図　第8次調査区出土土器(4)・第9次調査区出土土器(1)

121・126・127は比較的撚りの細い撚糸文を地文としている。

122～124は付加縄文を地文とするものである。122は極めて外傾度が強く蓋となる可能性が大きい。

Ⅷ群（133）

133は縦位の撚糸文を地文とする体部破片であるが、条の間が隔れている点を特徴とする。

以上であるが地文のみを施す130～132はⅥ群～Ⅷ群のうちのいずれかと共伴する可能性が大きいものと思われる。

尚、第９次調査区遺構外出土土器のうち144～154はⅠｃ群に、155～157はⅢ群に含まれるものである。

石器（第25図～第26図）

第８次・第９次調査区ともに出土点数が少なく、いずれもその所属時期を明らかにし得ないので一括して扱う。

石錐　（159）

159は大略円形の基部を作り出す石錐であり、比較的丁寧に調整されている。基部に自然面をわずかに残し、先端部を欠いている。

石鏃（160・162）

160は無柄平基の三角鏃であり両面ともに丁寧に調整されている。162は木葉形を呈する有柄鏃で基部の大半を欠いている。

石匙　（163～167）

163～165は縦形、166～167は横形である。いずれも側縁部を刃部とするもので、163・164は比較的丁寧に調整されるが、165～167は粗雑である。

削器　（168・171）

いずれも側縁部に刃部を有するが、171は不定形である。168は縦形石匙に類似する調整が認められる。

篦状石器（169・170）

いずれも大略楕円形～卵形を呈し、背面に大きく主要剥離面を残す。下辺を刃部をするが、刃部角度は鈍角であり掻器様となる。

掻器　（172）

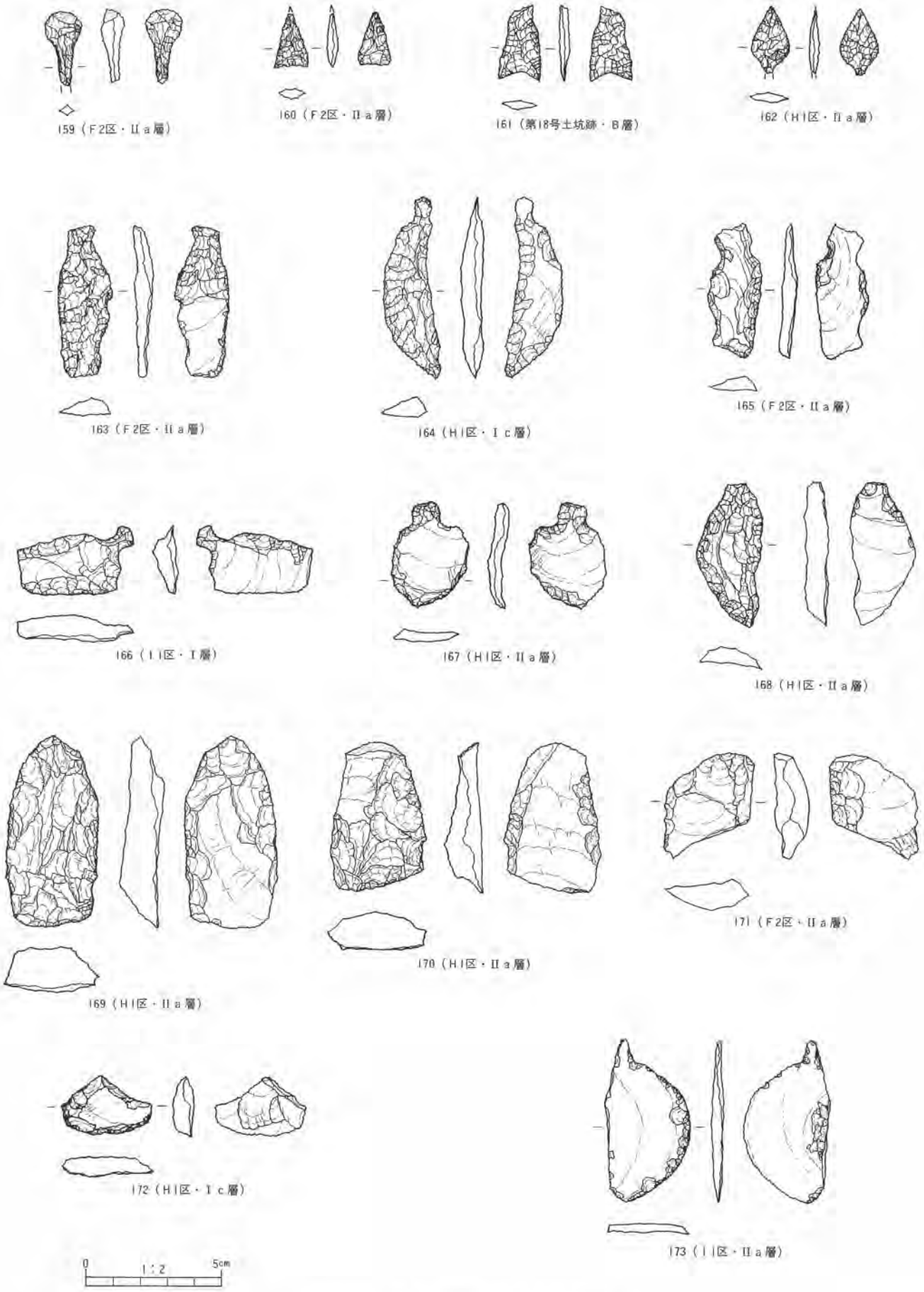
172は不定形剥片の周縁を調整して掻器の刃部を作り出すものである。

不定形石器　（173）

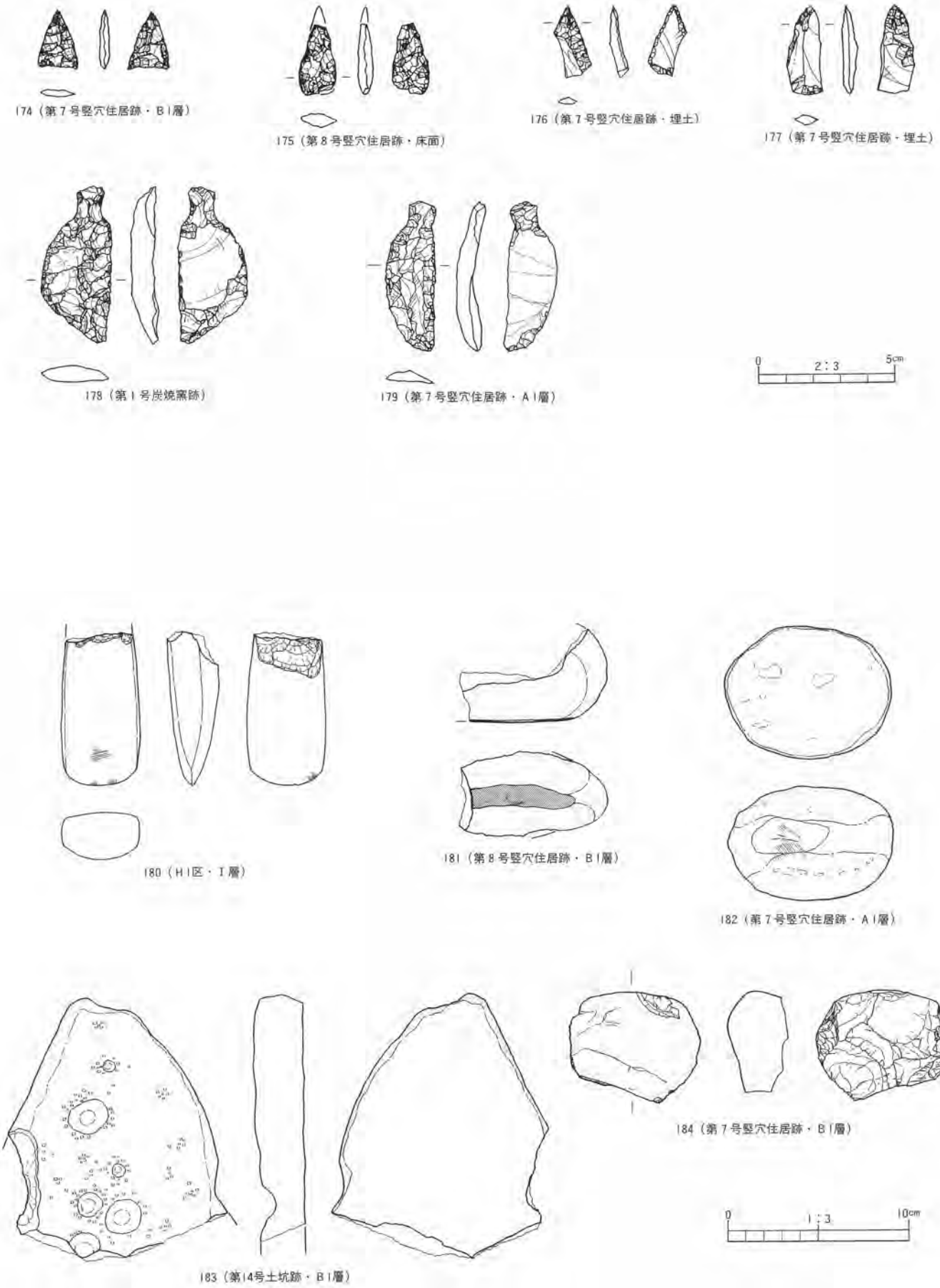
173は半円形の剥片の縁側を片側から調整するものである。削掻具の一類型かと思われるが、刃部があまりにも膨らんでおり、しかるべき名称を知らないのでここに分類しておく。

磨製石斧　（180）

180は前面にわたり丁寧に研磨した磨製石斧の刃部付近の破片である。再利用を目的としたものか基部に粗い剥離が認められる。



第25図　第８次調査区出土石器(1)



第26図　第8次調査区出土石器(2)・第9次調査区出土石器(1)

Ⅳ　調査のまとめ

第８次・第９次調査において、検出総数は少ないながらも、縄文時代前期初頭から弥生時代後期の長期間にわたる遺構が検出された。ここでは、これまでの調査成果も加えながら大付遺跡の集落と遺物について若干の考察を試みることにする。

１．第８次・第９次調査にて検出された遺構について

今回の調査における検出遺構の総数は決して多いものとは言えないが、縄文前期初頭から弥生時代後期までと、極めて長期間にわたり、各々の時期において意義を有するものと思われるので、所属時期の判明したものを中心に概観してみたい。

・縄文前期に伴うもの

第９次調査区の第７号竪穴住居跡は大木１式に伴うもので、不整隅丸方形の平面形と、床面中央に主柱穴を有すること、炉を持たないこと等が特徴として上げられる。

宮古市内では既に千鶏遺跡にて大木１式に先行する前期最初頭の千鶏Ⅰ式及び千鶏Ⅱ式に伴う竪穴住居跡が34棟検出されており、この調査成果によると、Ａ１タイプとしたものに最も類似している。しかし、第７号住居跡はＡ１タイプに特徴的な壁沿いの小ピットが伴わない点が相違点として上げられ、あるいはＡタイプの中で新たなグループに分類される可能性も指摘されよう。

いずれにしても大木１式に伴う竪穴住居跡は市内で最初の検出例であり、今後も類例の検出を注意深く見守る必要がある。

尚、本住居跡の出土遺物の中に、石刃鏃に類似するものや礫器を伴う点など、比較的古期の様相を呈していることは注目されよう。

・縄文中期に伴うもの

第８次調査区の第５号竪穴住居跡と第９次調査区の第８号竪穴住居跡が相当する。両者ともに遺構の全容を把握できていないために詳述を省くが、両者ともに地床炉を持ち、特に後者では複式炉的な形態を有していることは特筆されよう。

尚、第８号竪穴住居跡は大木８ｂ（～大木９式）に、第５号竪穴住居跡はこれと同時か、やや後出のものと思われる。

また、第18号土坑跡からも大木８ｂ式に伴う土器片が少量出土しているが、埋土に多量の炭化材等を含み、これまでの他遺跡での調査例と様相を異にしており、ここでは時期不明として扱いたい。

・弥生時代前期に伴うもの

第８次調査区の第６号竪穴住居跡が相当する。市内では既に上村貝塚にて該期の竪穴住居跡が検出されているので、これと比較すると、両者ともに隅丸方形を呈し、中央部に石囲炉を持つ点で共通点が認められる。しかし、本遺跡の場合は規模が著しく小さく、柱穴を持たない点が相違点として上げられよう。

・弥生時代後期に伴うもの

第８次調査区の第14号土坑跡が相当する。断面形態に特徴があり、今回検出した大方の土坑跡とは一線を画することができる。ただし、第16号土坑跡は第14号土坑跡と同様の形態を持つもので該期に伴う可能性が大きいと言えよう。

尚、これらの土坑跡の用途は貯蔵穴や墓壙などが上げられるが、残念ながら今回の調査結果からは結論を出すことはできない。

以上であるが、前述した以外の遺構については所属時期が不明である。

２．大付遺跡の集落について

明治43末年頃とされる大付遺跡（大付貝塚）の発見以来、昭和50年代以降を主体とする発掘調査は、いずれも個人住宅や道路敷設といった現状変更に先立つものが中心であったために、調査地点の片寄りがあり、遺跡の範囲や内容を必ずしも明確にし得ないのが実情である。

また、大付遺跡の東半部はかなり早い時期から漁村が形成されており、宅地化が進んでいることもこの一因となっている。

更に、地形的には西側の白石遺跡と大付遺跡は連続する台地上に存在し、両者の境界が不明瞭であり、『分布図　86』では第４次調査区東側を白石遺跡の東縁部と考えていた。

この後、発掘調査成果の蓄積もあり、第７次調査にて第４次調査区西側に存在する小規模な谷をもって両遺跡の境界線であると訂正することとなった。

これに今回の調査成果を合わせると、まず注目されるのが第８次調査Ａ区・Ｂ区に確認された谷の存在である。この谷はＡ区・Ｂ区では上面幅が約30m程度であるが、ここから市道崎山大付線に沿って北東に延び、大付遺跡北側の深い谷へと連続しており、この谷の支谷的様相を呈している。また、Ａ区・Ｂ区以西については、第７次調査区北側にわずかに谷状地形が認められるものの次第に不明瞭となる。因みにＢ区と谷地上のＣ区との比高差は２m程度となる。

この様に、Ａ区・Ｂ区付近から北東に延びる谷の存在により大付遺跡が立地する台地は東西に２分されることになる。谷より西側の台地は東西300m程度、南北180m程度の平坦面が広がり、東側の台地は南東側の緩斜面まで含めると、東西330m程度、南北220m程度となる。

これにこれまでの調査成果を総合すると、東西の台地において検出される遺構や形成時期に微妙な差異が認められることが判明した。

東集落・西集落

ここでは以上の様な事情により、谷により分けられた東西の台地をそれぞれ東集落・西集落と呼称したい。ただし、これは大付遺跡を東西２つの遺跡に分類しようとするものではなく、同一遺跡内の微地形により分けられた空間に着目し、各時期毎の空間利用や集落構成を追求しようとするものである。

縄文前期

これまでの調査資料や表面採集資料を総合すると、大付遺跡は縄文前期初頭から人々が居住をはじめたものと思われ、西集落では第４次調査区付近に遺物包含層が形成される。また、千鶏遺跡で前期初頭に伴い多出した“背面に自然面を残す石斧”に類似するものが第１次・第２次調査時に多出しており（打製石斧第４類『大付報文79』より）、これを前期に伴うものと見れば、東西両集落にその痕跡を認めることができる。

しかし、現時点では該期の遺構が検出されていないために集落構成等は全く不明である。

縄文中期

中期段階では西集落において、確実に集落が形成されはじめる。第８次調査区での出土遺物

によると、中期中葉～後葉にひとつの画期が認められそうであるが、西集落全体での状況を反映しているかどうかは定かではない。

検出遺構は竪穴住居跡や土坑類などであるが、やはり現時点では集落構成の全容を明らかにはし得ない。ただし、西集落全体に遺構が密集する状況にはなく、比較的散漫な分布状況を示している点は指摘されよう。

尚、この段階では今のところ東集落では全く遺構・遺物を検出していない。

縄文後期前葉

西集落に出現した中期集落は、第７次調査成果によれば、およそ後期前葉（門前式あるいは上村式～蛍沢式の段階）まで継続したものと見られる。検出遺構は竪穴住居跡や土坑類を主体とし、今のところ第７次調査区内に限定され、西集落全体に広がるものとは考えられない。該期においても東集落では遺構・遺物の確実な例は認められない。

縄文後期中葉～縄文文晩期中葉

やがて、およそ後期中葉に至ると西集落では遺構・遺物は検出されなくなり、代って東集落に集落が形成される様になる。

ここで、第１次・第２次調査Ｂ地点付近に形成された遺物包含層出土土器に目を向けると、時期毎の多寡はあるものの、後期の十腰内Ｉ式～晩期の大洞Ｃ２式の長期間にわたっており、これが東集落の存続時期を示していると考えられる。

尚、この段階で古くから周知されている本遺跡の貝層が形成されたものと見られ、その地点はＢ地点の西側と想定される（『崎山遺跡群Ⅲ』より）。

東集落での検出遺構数も現時点では少なく、後期の竪穴住居跡１棟、後期後葉の土坑墓１基、晩期前葉の屈葬人骨を伴う土坑墓１基、晩期中葉の土坑（墓）３基及び時期不詳の小ピット類などがある。

東集落における該期の集落構成についてもやはり不明瞭であると言わざるを得ないが、ある程度の時間幅を持って墓壙が確実に伴う点、比較的長期間にわたり遺物包含層が形成されている点、貝層が形成され動物遺存体のみならず骨角器が伴っている点などを総合すると、大付遺跡における前期～後期前葉及び弥生時代の集落とは根本的に異なった様相を呈していると言えよう。

この後、東集落・西集落ともに晩期後葉～末葉に至り、遺構や遺物が確認されず、集落が一時断絶した状態となる。

弥生時代

やがて、弥生時代に入ると西集落東部に位置する第８次調査区にて、砂沢式期の竪穴住居跡が１棟と、天王山式期の土坑跡が１基検出される。おそらくは、小規模な集落が断続的に営まれたものと想定される。

以上、かなり粗雑で乱暴ではあったが、大付遺跡における縄文時代～弥生時代の遺構変遷を概観してみた。大付遺跡では縄文前期から後期前葉において比較的大規模な台地が用意されていたにもかかわらず、西集落を中心とした比較的散漫な分布状況を呈する集落が形成され、やがて、後期中葉から晩期中葉では集落を東集落に移し、比較的充実した内容を有するものとなった。この後、一時断絶があったものの、弥生時代に入り断続的ではあるが再び小規模な集落が形成されたことを想定しておく。

東集落・西集落ともに調査地点が限定されており、今後の調査成果の蓄積により新たな知見が得られる可能性も大きいが、少なくとも現時点でのある程度の傾向はつかめたものと思われ

る。

尚、第９次調査区については、大付遺跡の立地する台地とは約20m程の比高差があり、低湿地に面した沖積平野に立地している点や大付遺跡との間に急峻な斜面を介在している点から、大付遺跡とは別の遺跡と考えるべきであろう。

更に、この地点は隣接するわたのは遺跡や萩沢Ⅰ遺跡などとも沢や低湿地などにより明瞭に区分されているために、これらとも別な遺跡であると考えられる。

従って現時点ではこの付近に分布する周知の遺跡とは異なる新発見の遺跡である可能性を指摘し、この遺跡の範囲や内容がある程度確認された時点で、しかるべき名称を付したいと思う。

３．出土土器について

既に遺構外遺物についてはⅧ群に分類してあるので、これに遺構から出土したものを加えた上で崎山貝塚出土土器等との比較を通し編年的位置づけを行い考察に代えたい。

Ⅰａ群　本群は横位の原体圧痕文を特徴としている。これに類似するものとしては早期末葉の吉田浜貝塚上層土器（相原　1990)、田柄貝塚貝層下土層土器（相原　1985)、表館第Ｘ群土器（三浦　1989）及び前期初頭の上川名Ⅱ式（加藤　1951)、長七谷地第Ⅲ群土器（大湯　1980）等が相当する。本群は極めて断片的な資料であるため、単に早期末葉～前期初頭に伴うものとしておく。

Ⅰｂ群　本群は押し引き沈線文を特徴としている。これに類似するものとしては上里遺跡に類例があり、これは既に熊谷常正氏により設定された第Ⅲ期に含まれる。氏によると第Ⅲ期は前期初頭の早稲田第６類や春日町式に相当という。

Ⅰｃ群　地文を施すもののみを一括したが、おおむね大木１式前後に伴うものと思われる。

Ⅰｄ群　胎土に植物繊維を含まない点でⅠａ群～Ⅰｃ群とは異なる。網目状撚糸文を地文とするもので、大木２ｂ式～大木４式に相当するものと思われる。

第７号竪穴住居跡出土土器　組縄縄文を主体とし少量の単節斜縄文を含む。羽状縄文は含まれていない。崎山貝塚第Ⅰ群土器に類似するもので、大木１式に相当する。（Ⅰｃ群）

Ⅱ群　口縁部に施された刻目状の原体圧痕文を特徴とする。崎山貝塚第Ⅷ群土器や重茂館遺跡群第Ⅳ群～第Ⅴ群に類似するもので、大木８ａ式に相当する。

Ⅲ群　隆沈線や平行沈線により渦巻文や懸垂文を施す点を特徴とする。崎山貝塚第Ⅸ群土器や重茂館遺跡群第Ⅵ群～第Ⅷ群土器に類似するもので、大木８ｂ式に相当するが、なかでも新しい部分に相当する可能性が大きい。

Ⅳ群　磨消技法により施文されるものを一括した。101は隆起線を伴うもので、崎山貝塚第Ｘ群土器に類似するもので、大木９式に相当する。102はモティーフが不明であり、崎山貝塚第Ｘ群～Ⅺ群土器に類似するもので、大木９式～大木10式に相当する可能性が大きい。

第８号竪穴住居跡出土土器　沈線より縦位楕円形区画文や退化した渦巻文を施す土器と、隆沈線により施文される破片が伴っており、磨消し技法により施文されるものは含まない。

施文技法にのみ着目すればⅢ群に含まれるが、モティーフに着目すればⅢ群よりやや下る可能性も考えられる。本資料が極めて断片的であることを考慮すれば、大木８ｂ式を主体をし、これよりやや下る可能性も加味しておくべきかもしれない。

Ⅴ群　連鎖状文を施すものである。崎山貝塚では該期の一括資料が未検出であるため第Ⅻ群土器として一括してある。本資料の施文技法に着目すれば、後期初頭の門前式との類似性を指摘できるが、断片的資料であるために典型的な門前式であるのか、近隣の白石遺跡のように亜流的なものであるのかは検討できなかった。

Ⅵ群　層位的なまとまりを有するものではないが、胎土・色調・焼成に強い類似性が認められる。器形は高坏あるいは鉢・壺・甕などで構成されている様であるが、高坏あるいは鉢が主体を占めており、口縁部形態では比較的バリエーションが認められる。

高坏あるいは鉢の文様は変形工字文と、これに付属すると思われる平行沈線文が主体となる。また、内面にも横位の沈線を施すが、口唇部よりやや下った位置に施される。

変形工字文は、やや退化した傾向が認められ、特に粘土瘤は概して痕跡的であり２個１対とならずに片側を省略する例も認められる。

本群に類似する資料は上村貝塚からまとまって出土している。県内出土の弥生土器編年試論をまとめた小田野哲憲氏によると、これらの土器に類似する資料は旧江釣子村蔵屋敷遺跡出土土器等を標式試料として設定されたⅠａ期に位置づけられる。

従って本群は弥生時代初頭の砂沢式もしくはこれに併行する時期に位置づけられよう。

第７号竪穴住居跡出土土器　１点のみではあるが、炉の構築土層から検出したものである。胎土・色調・焼成等から本資料もⅥ群に伴うものと思われる。

第14号土坑跡出土土器　いずれも破片ではあるが、今回の調査で唯一層位的にまとまりを持つ資料である。器形は甕を主体とし、少量の小形壺が伴う様である。

モティーフは小形壺の口縁部に施された交互刺突文と、甕の口縁部文様帯に平行沈線による波状文とこの間を充填する弧状文が認められる。

また、甕の体部は地文の回転方向を規則的に変えたり、幅の狭い横位縄文帯を施すなどの装飾的効果をねらっている。

本資料に類似するものとしては長根Ⅰ遺跡（長根古墳群）北尾根南東側斜面のⅡ層などから出土した資料が上げられる。これらが層位的にまとまりを有するものかどうかは定かではないが、本資料との類似性が強く少なくても型式的なまとまりは認められる様である。

長根Ⅰ遺跡出土例は出土点数が比較的多く、本資料よりはバラエティーが認められるものの、基本的には同じ内容を持つものと考えて良さそうである。

これらの資料は、小田野氏の編年試案によるとⅣ期に相当し、弥生時代後期の天王山式に伴うものとされている。しかし、本資料は氏が標式資料とされた水沢常磐遺跡出土土器や滝沢村湯舟沢遺跡出土土器等とは微妙な差異が認められ、特に前者とのそれが著しいと言える。むしろ、本資料と長根Ⅰ遺跡の例には比較的強い斉一性が認められ、当地方においてひとつのまとまりを持つ土器群が存在していた可能性が指摘できる。

この様な差異が、Ⅳ期における微妙な時間差であるか、あるいは地方色であるのかは資料の蓄積を待って再度検討すべきであると思われる。

Ⅶ群　第14号土坑跡出土土器及び小田野氏のⅣ期に類似するものを一括した。基本的には第14号土坑跡出土土器と同様なものであるが、これに付加縄文を施すものと蓋の可能性が大きい器種を加えるものである。

Ⅷ群　１点のみの出土ではあるが、小田野氏のⅤ期・赤穴式に相当すると思われるものである。

以上、今回の調査で出土した土器群を概観してみた。ここで若干の問題点を顧みて考察を終えたい。

まず第一は縄文早期末葉～前期初頭の土器群についてである。当地方では既に千鶏遺跡の調査成果に基づき千鶏Ⅰ式及び千鶏Ⅱ式が設定されているが、この後、追認資料には恵まれていないために、ひとつの型式としての要件を備えているのかどうかが十分検討できていない。また、千鶏Ⅰ式・Ⅱ式の直前、直後の土器群は依然として明らかにされていない。

一方、大木１式～大木２ｂ式に伴う資料は今回の第７号竪穴住居跡出土土器や崎山貝塚第Ⅰ群～第Ⅱｂ群土器などの様に徐々にではあるが資料が蓄積されて来ているものの、やはりそれぞれの型式において欠落している部分はあるのか否かといった検討は十分でない。

該期において、当地方は在地系の土器群に仙台湾周辺（あるいは更に南の地方）の土器群及び青森県周辺の土器群が複雑に交錯した様相を呈しているが、今後ともに類例の検出に努めその様相を明らかにしていきたい。

第二は弥生時代の土器群についてである。これまでの調査ではⅠａ期の上村貝塚でのみ唯一まとまった資料が得られている。今回の調査では断片的ではあるが、小田野氏のⅣ期の一括資料を得ることができ、既に調査された長根Ⅰ遺跡の資料と合わせていく分ではあるが該期の様相を知ることができたものと思われる。

しかし、これ以外の時期についてはまとまった資料を欠いているといっても過言ではない。

今回の第８次調査区周辺には、おそらくは小規模ではあろうが弥生時代の集落が営まれていた可能性が大きく、今後は周辺部での調査成果に期待したい。

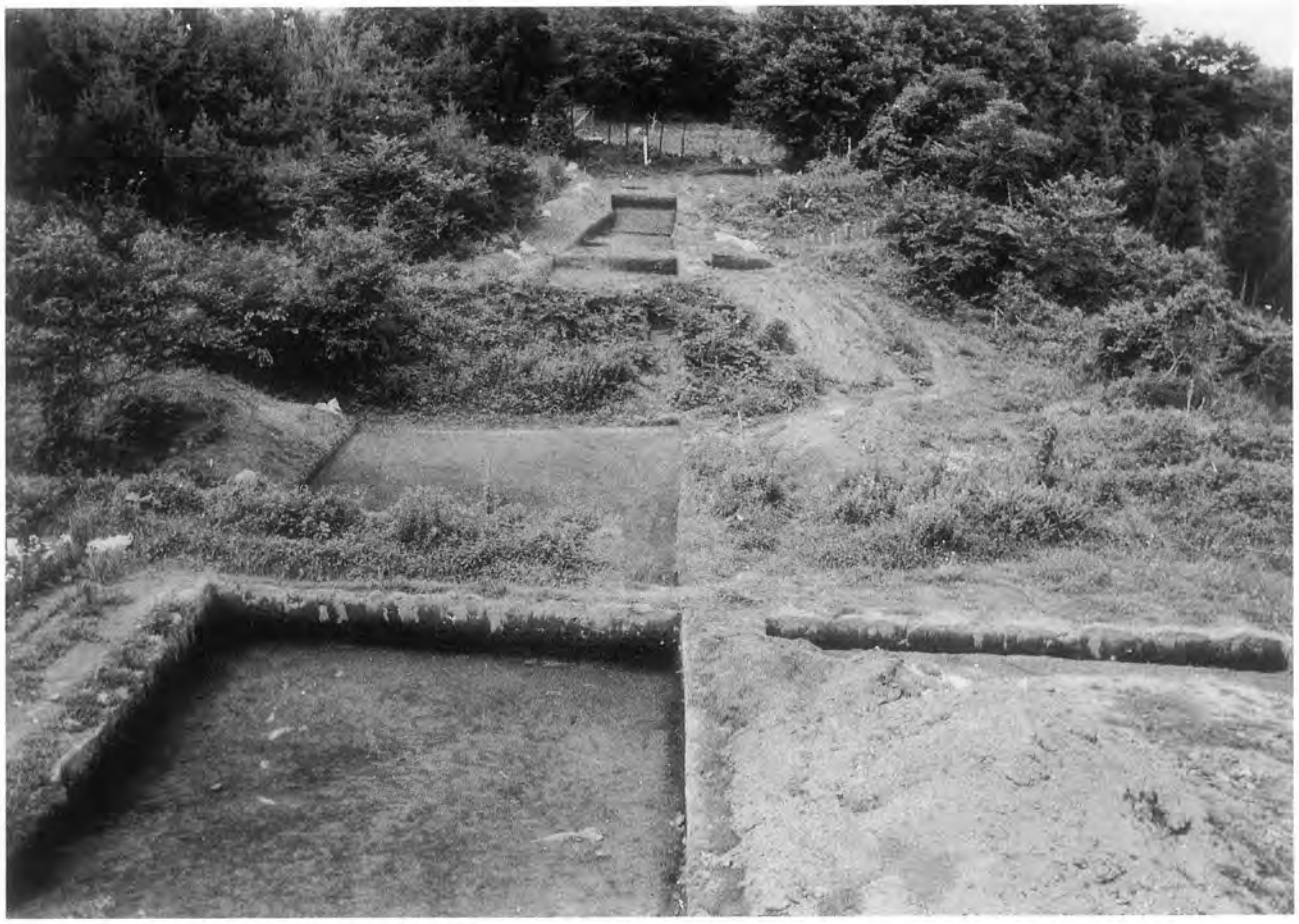
尚、本稿を草するに当り、岩手県教育委員会文化課小田野哲憲・佐藤嘉彦両氏には特に弥生土器について、遺物を実見していただいた上に貴重な助言をいただきました。文末ながらここに記して感謝申し上げます。

参考文献

加　藤　　孝　：1959「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院研究論文集』
大　湯　卓　二ほか：1980『長七谷地貝塚』青森県埋蔵文化財調査報告書第75集
熊　谷　常　正　：1983「岩手県における縄文前期土器群の成立－条痕文系土器群から羽状縄文土器群へ－」『岩手県立博物館研究報告』第１号
相　原　淳　一　：1985「縄文条痕土器の諸段階について－特に，花積下層－上川名上層式の成立をめぐる層位学的検討」『赤い本』第２号
〃　：1990「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年－仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に－」『考古学雑誌』第76巻第１号
小田野哲憲　：1987「岩手の弥生式土器編年試論」『岩手県立博物館研究報告』第５号

写　真　図　版

第８次調査区近景（Ｅ区よりＡ区を望む）

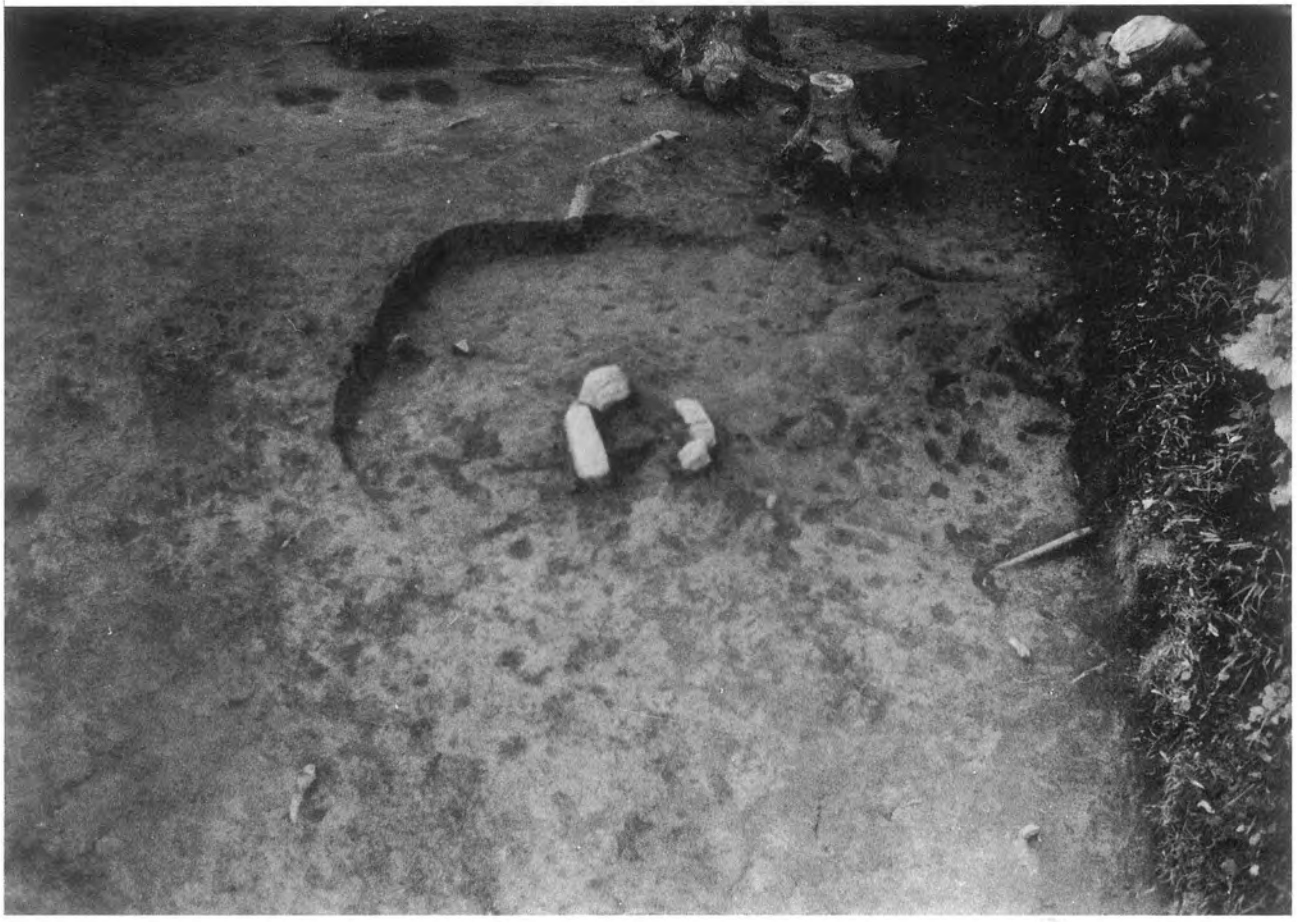


第８次調査区近景（Ａ区よりＥ・Ｆ区を望む）

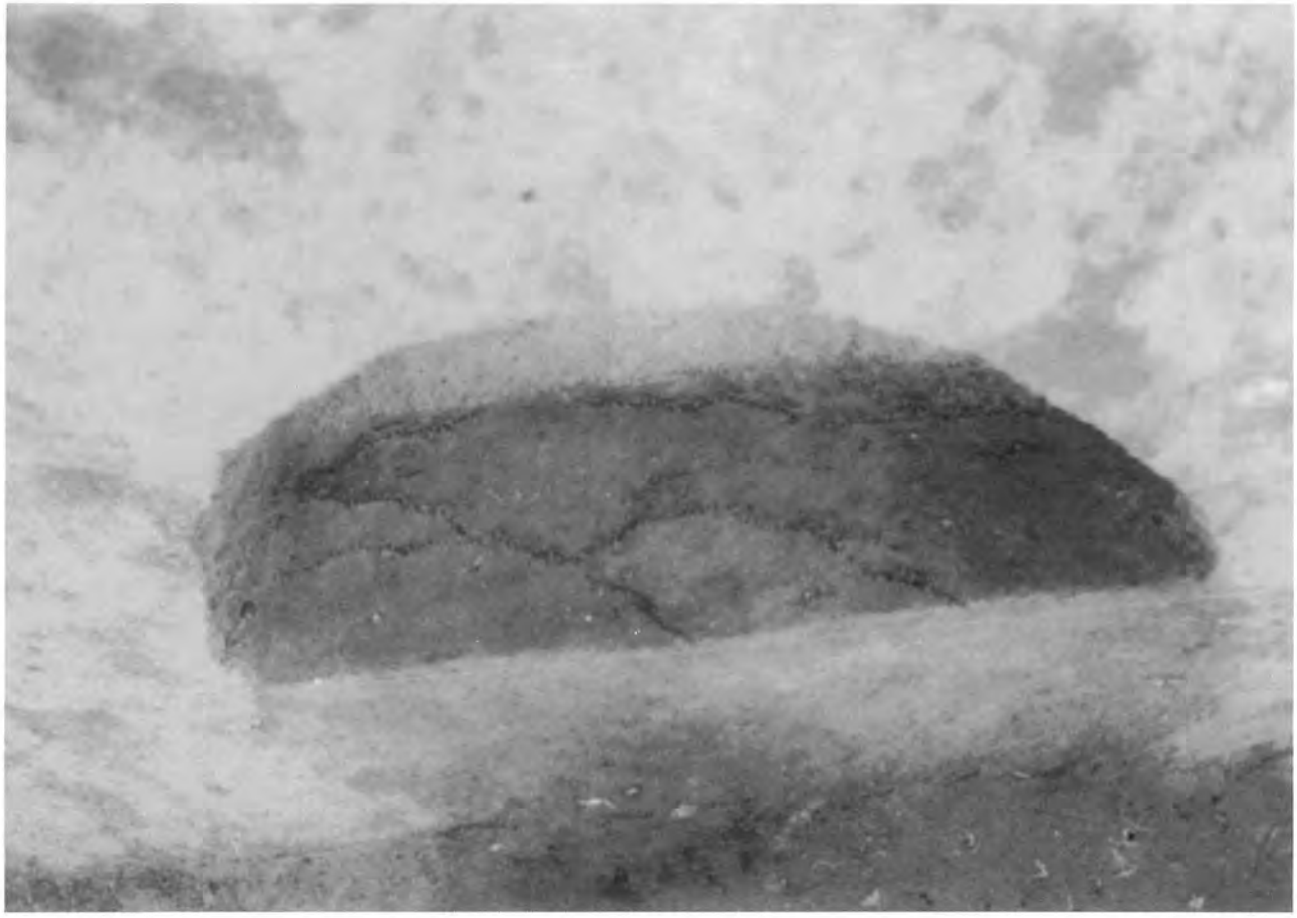
第２図版

第５号竪穴住居跡

第６号竪穴住居跡堆積状況

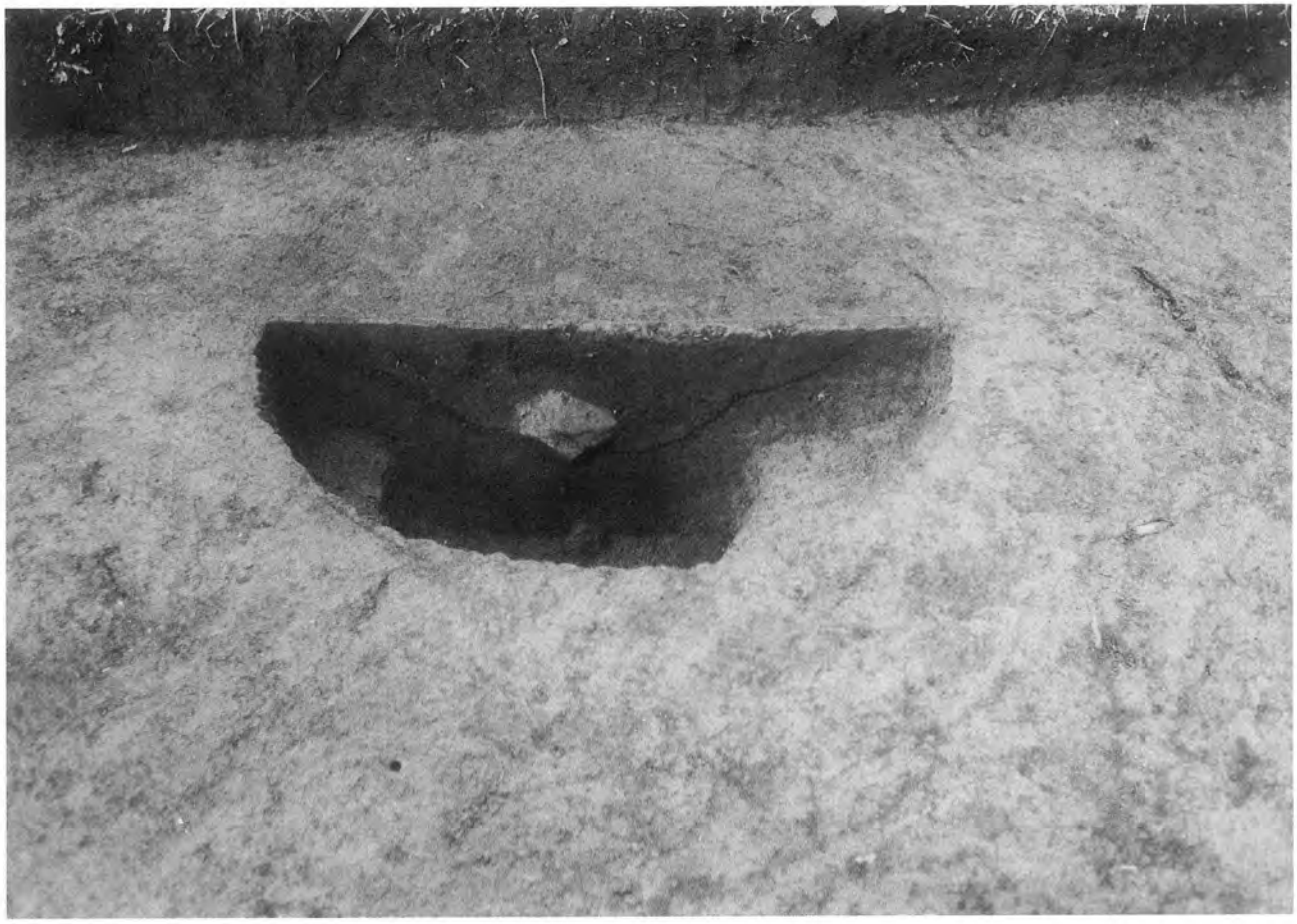


第６号竪穴住居跡

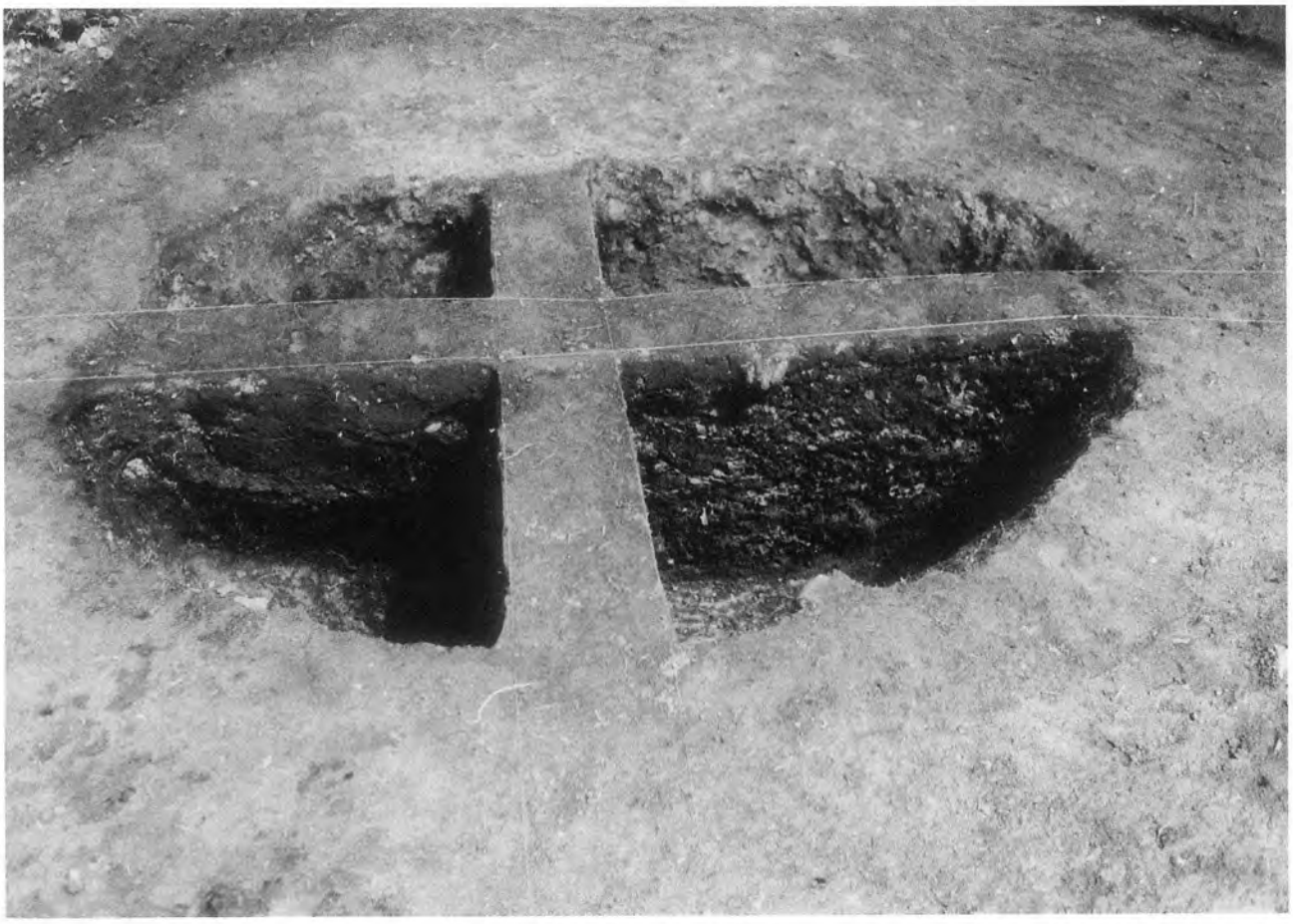


第12号土坑跡堆積状況

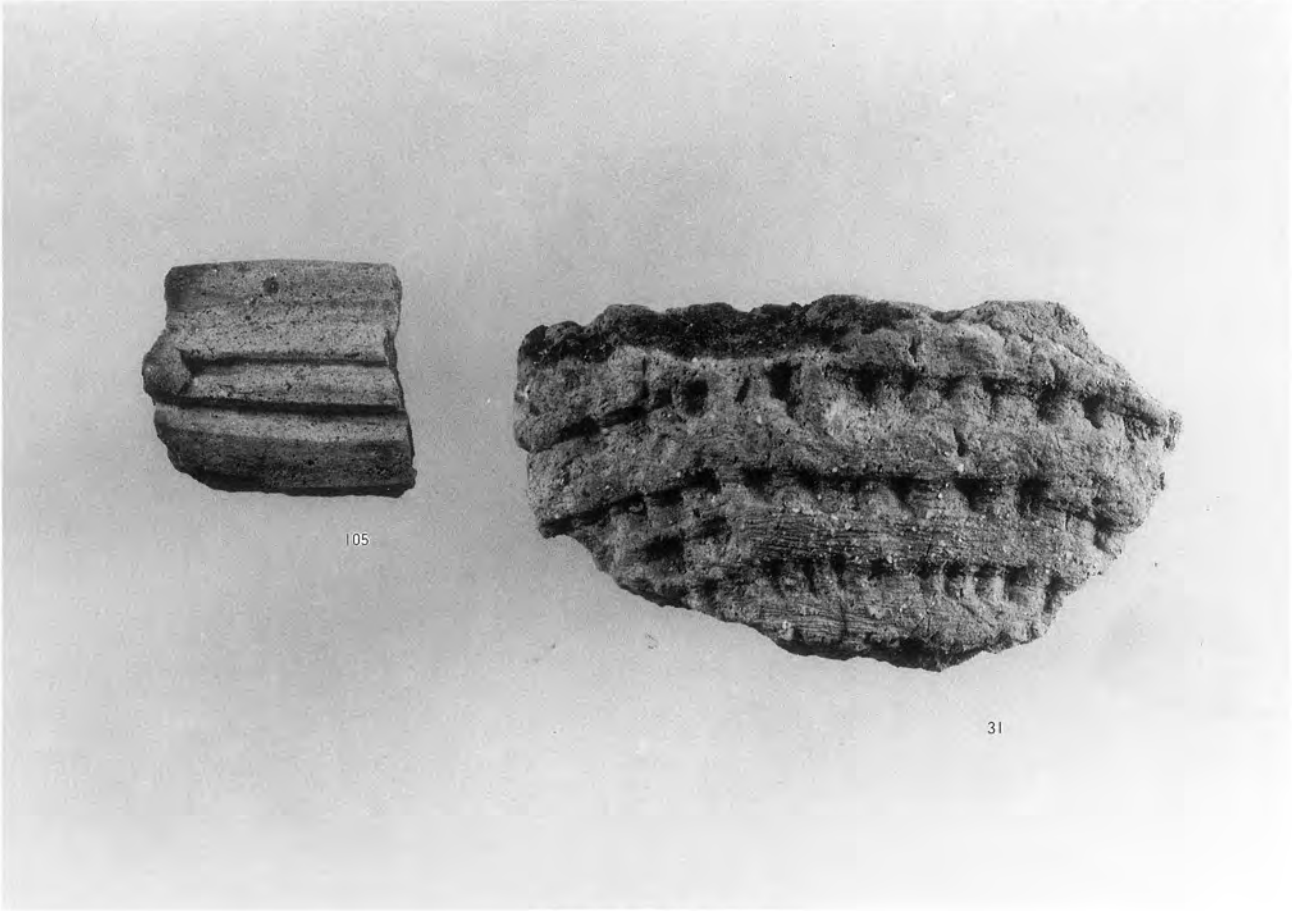
第４図版



第16号土坑跡堆積状況



第18号土坑跡堆積状況

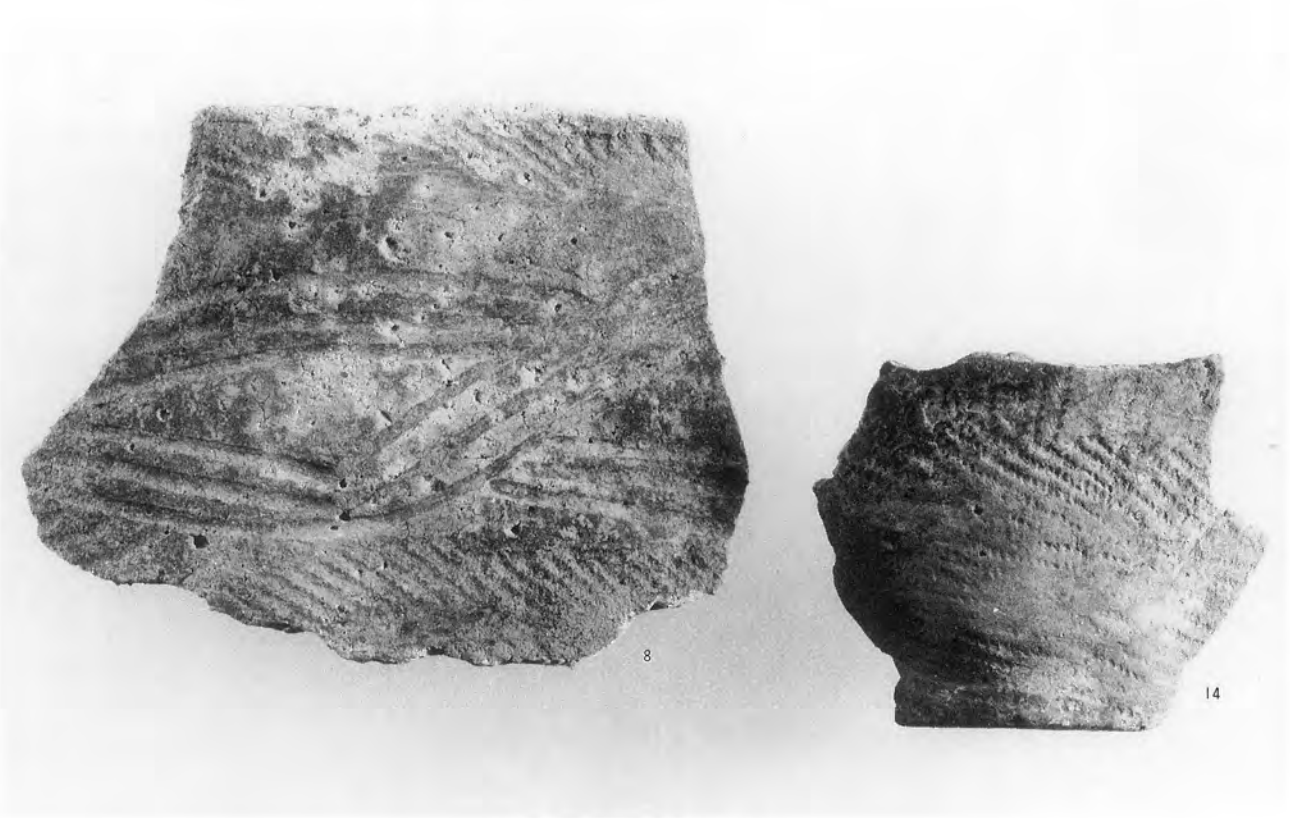


第８次調査出土遺物

第８次調査出土遺物

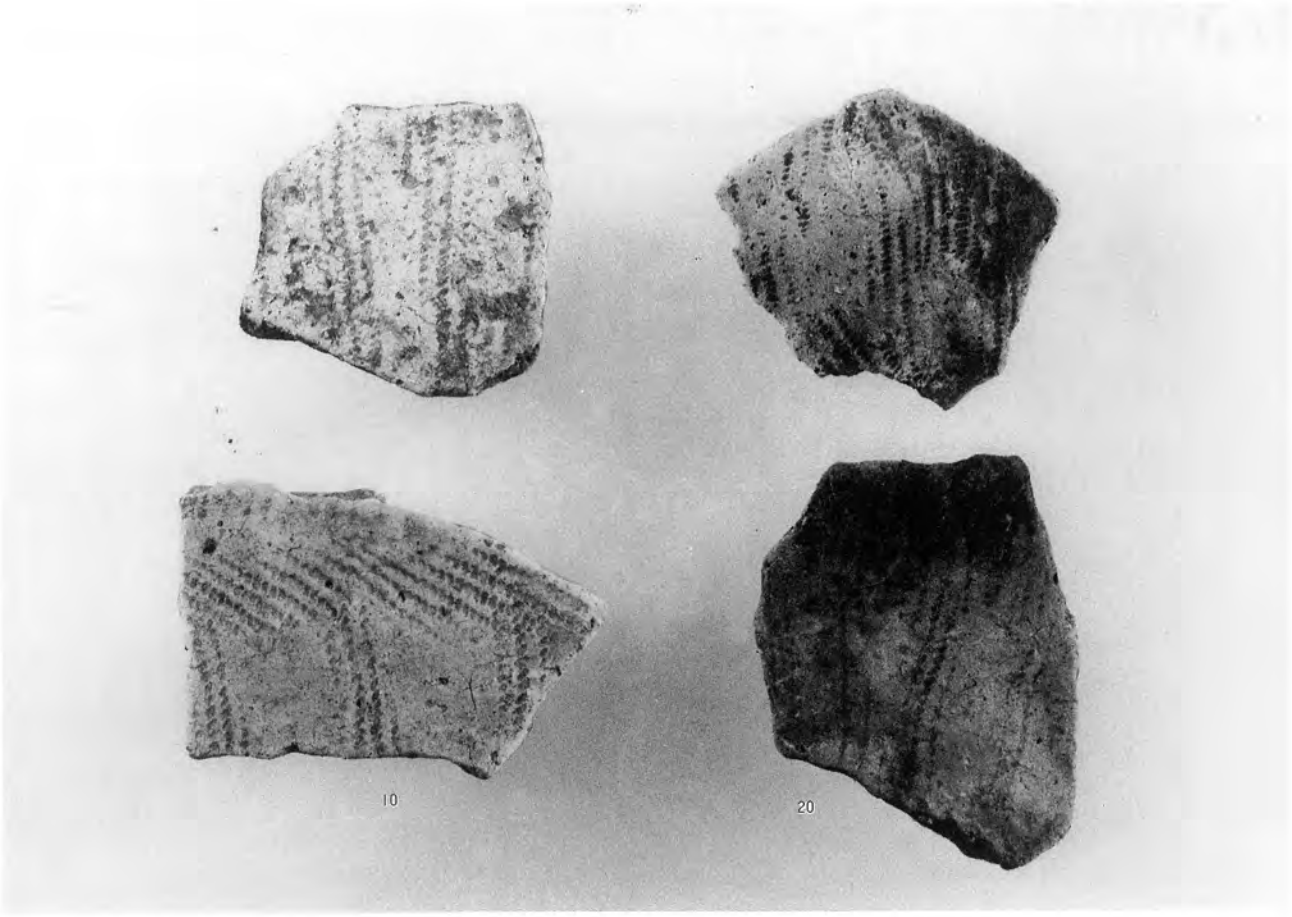
第６図版

第８次調査出土遺物



第８次調査出土遺物

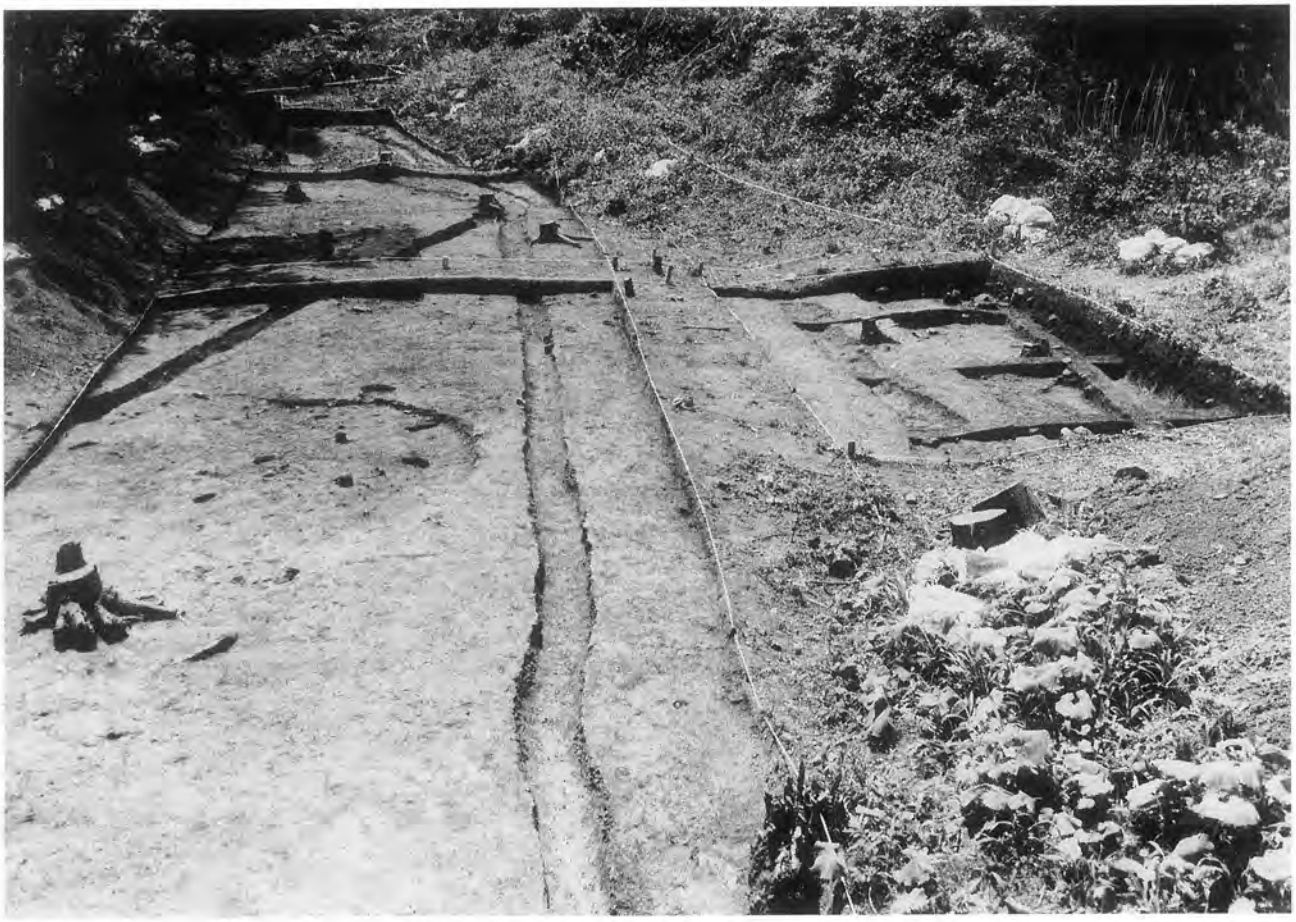
第７図版



第８次調査出土遺物

第８次調査出土遺物

第８図版



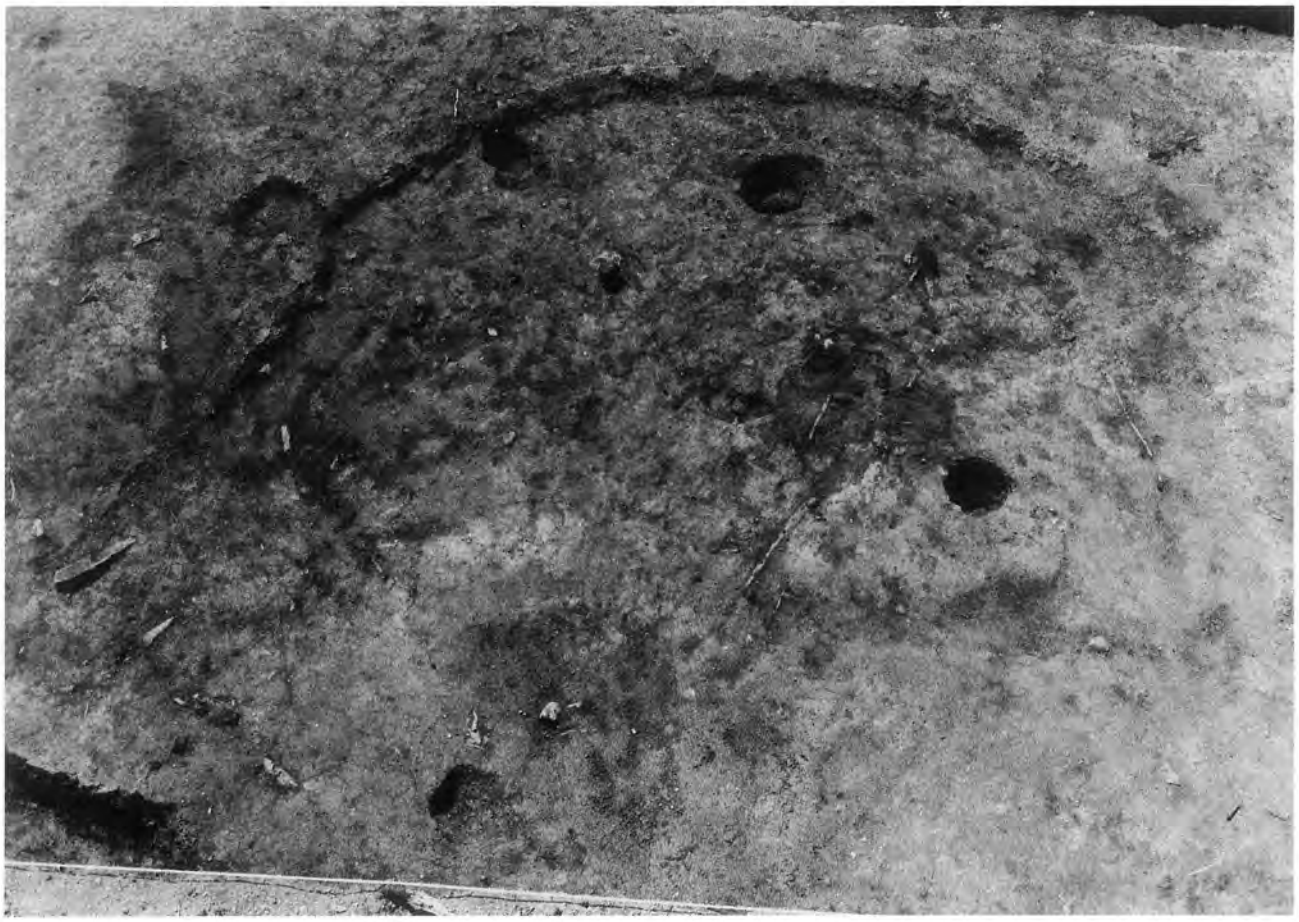
第９次調査区近景（Ｋ区よりＬ区を望む）

Ｊ区土層堆積状況

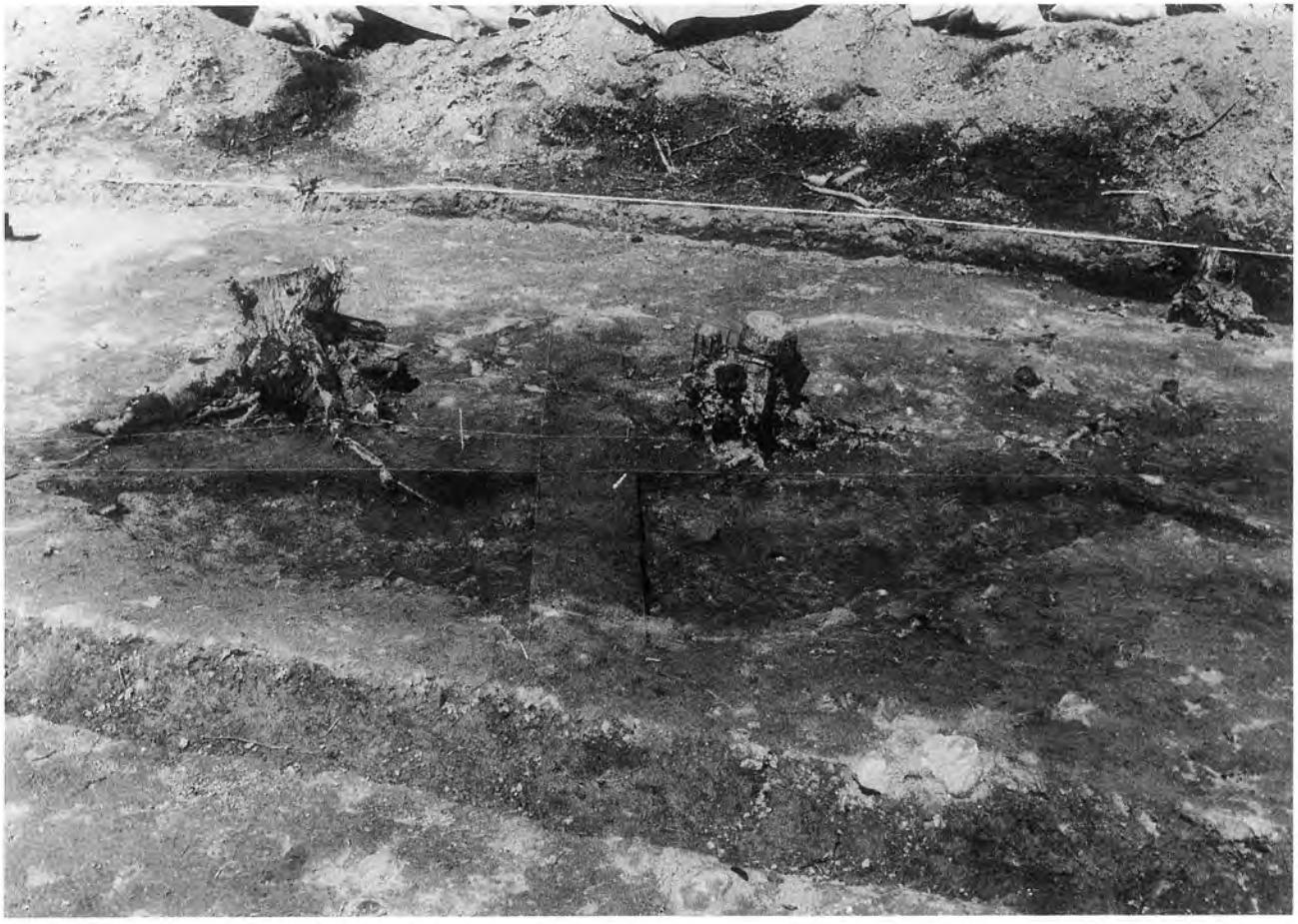
第７号竪穴住居跡

第７号竪穴住居跡堆積状況

第10図版



第 8 号竪穴住居跡



第 8 号竪穴住居跡堆積状況

報告書抄録

ふりがな	おおづけいせき
書名	大付遺跡
副書名	平成5年度、平成6年度発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	宮古市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	№48
編著者名	高橋憲太郎、橋本晃一、三浦千秋
編集機関	岩手県宮古市教育委員会
所在地	〒027　岩手県宮古市新川町2－1　TEL0193－62－2111
発行年月日	西暦　1996年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
大付遺跡（おおづけいせき）	岩手県宮古市（いわてけんみやこし） 大字崎鍬ケ崎（おおあざさきくわがさき） 第14地割、15地割	――	LG14―2291	39°40′18″	141°58′43″	平成5年度～ 平成6年度	1,500 166	道路敷設工事 道路敷設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大付遺跡	集落・貝塚	縄文時代前期	竪穴住居跡1棟	土器・石器	前期初頭の大木1式に伴う
		縄文時代中期	竪穴住居跡2棟 土坑跡	土器・石器	中期後半期主体
		縄文時代後期	無し	土器	後期初頭の門前式併行
		弥生時代前期	竪穴住居跡1棟	土器	前期初頭の砂沢式併行
		弥生時代後期	土坑跡1基	土器	天王山式に伴う土坑跡及び周辺から土器が出土また、別地点から弥生時代末葉の赤穴式に伴う土器片も出土
		時期不明	炭焼窯跡1基 溝跡4条 土坑跡1基		

宮古市埋蔵文化財調査報告書48

大付遺跡

—平成５年度、平成６年度発掘調査報告書—

1996.3

発　行　岩手県宮古市教育委員会
岩手県宮古市新川町２番１号

印　刷　花坂印刷工業株式会社
岩手県宮古市新川町１－２